（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。

憲問第十四

１）憲問恥子曰邦有道穀邦無道穀恥也

xiàn wèn chǐ zǐ yuē bāng yǒu dào gǔ bāng wú dào gǔ chǐ yě
憲、恥を問ふ。子の曰はく邦道有りて穀し、邦道無くして穀す、恥なり。

憲は姓は原、名が憲、字が子思。恥は耳と心からなり、“はずかしさ”は耳にあらわれるものとみなされたのであろう。耳は内心のささやきを聞きとることもできねばならない。耳が赤くなり、身がちぢむ思い。巧言令色足恭左丘明恥之丘亦恥之匿怨而友其人左丘明恥之丘亦恥之（[公冶長25](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/koyacho.htm)）。一人合点、早合点も恥の因。多くを聞き疑わしきを去らば、聦、聰（聡明の聡）となる。邦有道貧且賤焉恥也邦無道富且貴焉恥也（[泰伯篇13](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/taihaku.htm)）。この関連からして邦に道あるとき穀す、禄を得ることはいいが、邦に道のないときに穀す、禄を得るのは恥と解釈される。しかし、ここでの響きはそうではあるまい。邦に道あろうが無かろうが、禄を得ることしか考えていない、それは恥かしいことだなあ、と士官して禄を得ようともしない原憲に、それはそうだがと半ば同意しつつも、少しは録のことも考えろといふところか。後に、司馬遷は荘子を引用した。「孔子卒す。原憲、遂に草澤の中に亡在す。子貢、衛に相し、駟を結び騎を連ね藜藿（れいかく）を排し窮閻（きゅうえん）に入り過ぎて原憲に謝す。憲、敝れた衣冠を攝し、子貢を見る。子貢、之を恥じて曰く、夫子、豈に病むか。原憲曰く、吾之を聞く。財無き者之を貧と謂う。道を学びて行なわざる者之を病と謂う。憲の若きは貧なり。病に非らず。子貢、慙じ懌ばずして去り、終身其の言の過ちを恥じるなり。（孔子が亡くなって、原憲は草深い澤でひっそりと生きている。衛の宰相となった子貢が四頭だての馬車に騎馬を従えて子思を訪れる。藜はあかざの葉、藿は豆の葉、藜藿は粗食を意味する。排は押し開くこと。閻はさとの門、巷、見目麗しいこと。窮閻であるから馬車で通れるような場所ではない。譲王篇では草で葺いた、ぼろで窓を隠す、雨漏りのする一間四方のあばら家である。謝はことばで告げることであるが、辞する、断る、しぼむの義があり、子貢の複雑な心境を表している。攝は着物のすそをたくしあげること、破れた衣冠をつくろって子思はでてきた。孔門にあるものとして、子貢は之を恥かしく思い、病気なのかと問うしかなかった。子思はこういうことを聞いた、「財の無いことを貧(pin)という。道を学んで実践しないことを病(bing)」という。私は貧であるが病でない。荘子は子貢が逡巡し愧色有り、原憲笑いて曰く、世に希いて行ない、比周して友となし、學は人の為にし、敎は己の為にし、仁義の慝（心をいつわる）、輿馬の飾、憲は為すに忍びぬ。）」と記している。顔回は貧困のうちに死んだ、原憲にもそうなって欲しくはなかったのだが・・・
読書会：今の世の中、食べ物の偽装、賞味期限の改竄、口止め料をもらってやっている。吉兆でも従業員は知っていた。邦のところを会社に置き換えれば、会社が不正をしているとき、給料をもらっては恥だが、給料をもらって生活をしなければならないのだから、これをどうするかの問題。孔子の時代には、そういう場合国を変えることができる、他で職につくことができたとしておられるが、転職できなければ、現実問題どうするか？孔子の道徳的なところを勉強している人は、おいそれと出てゆけなくなる。どうしろと言っているより、もし俸禄をもらって出てゆき社会的パワーを持つようになれば、恥のところはそんなに重要ではなく、邦に道のところに重要性がある。打って出て欲しいのに出てくれないのが原憲。あの時代は、政治や社会が変わり、古典的世界は破れ、新しい士大夫レベルの力が強くなり、70～80％以上の士人は戦国時代の縦横家、俸禄のために働く人、孔子のような人ではなく、孔子は道徳を持ってから俸禄のために働く。中国では仕官と隠逸が対立する概念、前近代詩人を通じての問題。同じような言葉があるが、全く同じでなく、シチュエーションが異なり、何箇所かに分けて置かれた意味がある。ことばが生成された場を考えると深く読める。

２）克伐怨欲不行焉可以為仁矣子曰可以為難矣仁則吾不知也

kè fá yuàn yù bù xíng yān kě yǐ wéi rén yǐ zǐ yuē kě yǐ wéi nán yǐ rén zé wú bù zhī yě
克、伐、怨、欲、行はずんば、仁を為すといふ可きか。子の曰はく、以て可とすは難し。仁則ち吾知らざるなり。

集註は、此れ亦原憲其の能くする所を以て問うなり。克は勝つを好む。伐は自ら矜（ほこ）る。怨は忿恨。欲は貪欲なり、とする。克伐怨欲を行はざれば、可以は可能、仁を為すと言へるか？といふ問いは上の故事からしても、原憲ならばそれを行ひ得たと思はせるところがある。また、原憲に対するものであるから、仁則吾不知也となったのであろう。可以為難は「以て難きと為す可し」と訓ぜられるが、可以とするには為難であろう。原憲には子貢とは対照的ではあるが、逆の意味での気負いがあった。荘子は、「憲笑曰夫希世而行(世評を求めて行う)比周而友(小人君子として友となる)學以人為(学んで人に誇る)敎以為己(教えて己を利す)仁義之慝(仁義と偽ってなす)輿馬飾(車馬を飾る）憲不忍為也」とその気持ちを表した。
読書会：違うシチュエーションですが、チベットのダライ・ラマの所に関西の人が会いに行き、仏教のことを尋ねておられた。とても会いたくて、チベットに行かれ会われた。仏教って何ですか？といきなり、原点、30代の女性だが、英語もそのためにものにして、原点を質問されたときのダライラマの返事が、私も一生懸命やっているが、いまひとつ、良く分らない。というのを思い出した。よくやっている人は、よく分らないという。孔子は仁の大家、体現するのは弟子。概念をやっている人は、私は本当はよくわからないは、非常に納得した。克、伐、怨、欲の行われざるは、原憲その人自身のこと、それこそは仁ではないかと聞きたかった。孔子にしてみれば、そうかもしれないが、それは実行するのが難しいでしょ、これが仁がどうかはわかりませんね。とわざとぼかした答え。克、伐は他人より上にゆくこと、怨、欲は、内面にくすぶること、可以は虚字、助字。可は可能ではなく、許可を表す。可以為仁矣となっており、質問形ではない、彼のポリシーをいう。知らざるというのは、分かっているつもりだろうが、わかっていない、という言い方になっている。孔子はよく、仁者かどうか分からないと言う。その人自身のイメージはあり、それなりの評価はしているが、本人が仁かどうかは分からないと言う。自分自身を高めるだけではいけない、自分を高め、なおかつ、文質淋淋、人に施してゆく、与えてゆくことが大事。

３）子曰士而懷居不足以為士矣
zǐ yuē shì ér huái jū bù zú yǐ wéi shì yǐ
子の曰はく、士にして居を懷ふ、以て士と為すに足らず。

「君子･･･居無求安･･･（[学而篇14)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）」とある。「君子懷德小人懷土（[里仁篇11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)）」ともある。先生は、住居として快適なものを求めること、郷土に固執することを良しとされなかった。君子の心得であるが、ここで士の心得として、居を懷（おも）ふことなきよう諭された。士の土は徳、士の安は志、郷土に非ず、居に非ず。諸国に居を求めて居を得ず。魯に戻った先生であるが、帰るべきは周公の魯であった。
読書会：士というのは究極の選択をする人、今で言えば、火中に入り人を救助する消防士、これは非常によく分る形。消防士は地震に際しては、自分の家庭はおいて職場に集まり、仕事を先にする、究極の選択をする。究極の選択とまでいう必要はなく、自分の志を尽くすこと。士は為すことあるの志を持つもの、居を懷う、郷党、家庭など自分の安逸を求める、ではなくて厳しいもの。

４）子曰邦有道危言危行邦無道危行言孫

zǐ yuē bāng yǒu dào wēi yán wēi xìng bāng wú dào wēi xìįng yán xùn
子の曰はく、邦に道有れば言を危くし行を危くす、邦に道無くば、行を危くし言孫ふ。

なんとも奇妙な用語の選択である。集註に、危は高峻なり。孫は卑順なり、とある。危wēiは古語で高い、同音で巍（高大なるさま）、威（人をおさえて服せしめる力）がある。説文に、「高きに在りて畏るるなり。」とある。孫sūnをxùn遜（差し控える）と読ませている。危（たか）し、孫（したが）ふと訓じる。「冠を危くす」とは、冠を正しくつけること、危坐とは端坐すること。危言危行とは正言高行して世俗と妥協しないこと（字統）。危行言孫は行いは正しくし、言葉は差し控えること。何故このような言葉を選択しなければならないのか？周が天命を得て政治を行うにおいて、周公は成王に、為政者として、言葉、行為を畏れて天命を失はぬようにつとめることを求めた。武王や病を患ったとき、周公は占いの結果吉とでたことを金籐にいれて封印した。武王は平癒された。しかし、武王が亡くなられたとき、周公が王位を狙っていると讒言するものがあった。周公は心を尽くして成王を慮った（危行）が、言葉を慎みじっと耐えておられた（言孫）。その金籐が開かれたとき、周公が武王の身代わりとなるといふ誓詞があらわれ、その危行が明らかになったという故事がある。
読書会：危行言孫といっても実社会では反抗することになり、むつかしい。孔子はそれくらいのことがないといけないと言っている。見せ続ければ、何かが変わる。それに耐えるのが人の苦悩。自分の言うことが受け容れられない現実にあって、孔子はあるべき姿については変えることはなかった。実現されてはいないし、現実的には無理といわれても、変えようとはしなかった。

５）子曰有德者必有言有言者不必有德仁者必有勇勇者不必有仁

zǐ yuē yǒu dé zhě bì yǒu yán yǒu yán zhě bú bì yǒu dé rén zhě bì yǒu yǒng yǒng zhě bú bì yǒu rén
子の曰はく、有德者必ず言有り、有言者必ずしも德有らず。仁者必ず勇有り、勇者必ずしも仁有らず。

言とは心にあることを口に出すこと。如何なる心から出てくるかが問題。徳を心に抱いている人から出る言葉には徳がある。徳を心に抱かないならば、如何なる言葉を連ねてみても徳は現れない。義不爲無勇（[為政篇24](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）先生は勇は仁、義に裏付けられたものでなければならないと考えておられた。仁を輔け義を輔けることができない心には勇は無い、といふのが先生であろう。さような心を磨くことを求められた、行うこと難し。以下に勇あれど仁無きの人物、徳ある人物が置かれる。
読書会：仁者が自分自身を捨てて他人を救う、そういうことが出来るなら、勇気のある行動。徳ある人は言、仁ある人は勇あり、童君が前に言ったように、一つ一つだけに対応しているのではなく、色々同時に兼ねている、互文。

６）南宮适問於孔子曰羿善射奡盪舟俱不得其死然禹稷躬稼而有天下夫子不答南宮适出子曰君子哉若人尚德哉若人

nán gōng kuò wèn yú kǒng zǐ yuē yì shàn shè ào dàng zhōu jù bù dé qí sǐ rán yǔ jì gōng jià ér yǒu tiān xià fū zǐ bù dá nán gōng kuò chū zǐ yuē jūn zǐ zāi ruò rén shàng dé zāi ruò rén
南宮适、孔子に問ひて曰く、羿射を善くし、奡舟を盪かす。俱に其の死然るを得ず。禹と稷、躬ら稼して天下を有つ。夫子、答へず。南宮适、出ず。子の曰はく、君子なるかな若き人。德を尚ぶかな若き人。

南宮适、字は子容。[公冶長篇2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)の南容。義疏では、字敬叔として、南宮敬叔と同一人とするが、別人とされる説もある。南宮适は何を問ふたのであろうか？羿（げい）、奡（ごう）、禹（う）、稷（しょく）が分からなければどうしようもない。淮南子、本経訓に、「十個の太陽が一度に出たため、四季の運行が狂い農業不能に陥り、人を食う猰貐、鑿齒、封豨、脩蛇といった怪獣や九首の水火の怪九嬰、大風の災厄に悩み、堯は弓矢の名手羿を用いて九日を射落し、その他の厄介者を射殺しあるいは剣で斬り刻み、生け捕りにし退治した。」という話が記されている。この羿が家来の寒浞（かんさく）に謀殺される、奡は羿の夫人と寒浞の子、陸地に舟を盪（うご）かす力の持ち主、後に夏の少康に誅せられる。俱（とも）にまともな死に方をしていない。勇者必ずしも仁有らず。禹は全土を覆う洪水を自ら治めて夏を開き、稷は穀類を植えることを始めて周の遠祖となった。稼は穀類が稔ること、俱（とも）に自ら治水、農耕にたずさわり民を益し天下を有（たも）った。出来ると思へない難事に挑む、仁者の勇ではないか。南容の言葉は質問とは言い難い。これは前段の孔子の言葉に対して、南容はそれはこういうことですか？と例をひいて問ふたとことになろうか。先生は南容に「有德者必有言」、この言葉には徳があると感服された。まさに、「邦有道不廢邦無道免於刑戮」、父は孟僖子、孟懿子とは兄弟の南容。若（かくのごと）き人は君子であり、徳を尚（たうと）ぶ人である。

読書会：これは自信をもって言っている、質問のようだが、そうでなく自信をもった言い方。儒家は、いない時に、いいポイントを言う。不言人之蔵否、悪い人の場合には、その人の前でいう。死然は死―然となっており、熟語として読むべき。蔵否、善悪を人前で言わない、人物批評を人の前でいわないというのは後漢以降の士大夫徳目となった。現代世界では世界中どこでもほめる、99%そうでしょうが、孔子の時代は人前でほめることはよくないとされた。羿は二つのシステムで評価がある、儒家のシステムでは暴力の人、庶民の神話のシステムでは英雄。

７）子曰君子而不仁者有矣夫未有小人而仁者也

zǐ yuē jūn zǐ ér bù rén zhě yǒu yǐ fú wèi yǒu xiǎo rén ér rén zhě yě
子の曰はく、君子にして仁ならざる者有るか。夫れ未だ小人にして仁なる者有らず。

有矣では有るか、そういうこともあるだろうな。君子は仁を志すといえども、仁なることは得難い。しかし、小人が仁者たることはない。南容は君子であるが、仁者とはいえぬ。さりとて樊遲が仁者となることはありえない。徳を修めるのは君子レベル、その徳が民を感化し、民の安寧をはかるレベルでなくば仁者とされなかったのであろうか。
読書会：不―仁となっているのは続けて読む、不仁者有るか。不特定のように書かれているが、80～90%は特定の人物を指している。唐初の孔穎達がここの人物は管仲とした。管仲は天下のために夷狄を討ち中原を守った。管仲の器小なるかな」、「管氏、また、樹して門を塞ぐ」、「管氏、また、反坫有り」、と管仲は90%君子なのですが、不仁なところがある。後に孔子は管仲を仁者とみており、ここのモデルとするにはどうもしっくりしない。小人は身分が低いということで、女性も入る。自分でない方のことを言っており、そういう人を愛することとつながっていく。身分がよく徳を得た人は愛して労する、次は小人で対になっている、前後の三つはセットで読むべき。

８）子曰愛之能勿勞乎忠焉能勿誨乎

zǐ yuē ài zhī néng wù láo hū zhōng yān néng wù huì hū
子の曰はく、これを愛せば、能く勞すこと勿からむか。忠す、焉ぞ能く誨ふること勿らむか。

これだけでは、分からない。愛之の之とは何か。愛人ではないから之は人ではあるまい。能勿～、～でないことがあろうか、いや～する。焉は、そこで、初めて、すなはちの義。誨とは、諭（さと）し教へることであり、後段は忠の心があるなら、すなはち、誨へないことがあろうか、いや誨へる、となる。之を人とみて、勞を“いたわる、ねぎらふ”とみるむきもある。人を愛せば、いたわらないことがあろうか、いやいたわる、では後段と意味が通らない。勞は[公冶長篇26）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)の、「顏淵曰く、願はくば善を伐（ほこ）ること無し、勞を施す（わづらはす）こと無し。」の勞であろう。之を愛すなら、勞さないことがあろうか、いや、勞す。顔淵は、勞を施すこと無し、としたが孔子はそうではない、勞すものであるといふ。之とは何か。集註は、蘇氏曰く、愛して勞せしむること勿きは、禽犢の愛なり。忠にして誨うること勿きは、婦寺の忠なり。愛して之を勞せしむることを知れば、則ち其の愛爲るや深し。忠にして之を誨えしむることを知れば、則ち其の忠爲るや大なり、と朱子も自らの見解を述べず、蘇氏（唐の蘇鶚）の言をひいているのみ。禽犢とは鳥類と獣類。婦寺の忠は、乳母なぞが親より乳児を可愛がるもの。之とは、政治における、学ぶことと教えること、学ぶ者と教える者の志のことか？
読書会：もし本当に自分の子供を愛する場合、偉い人物にするために、色々のことをさせ、苦労させなければならない。もし、よく自分の王に忠であるなら、偉い王にするためには、諌める、諫言してこれを導かねばならない。言うことは易しいがこれを行うことは難しい。愛而勿勞、禽犢之愛也。忠而勿誨、婦寺之忠、前半は孝、後半は忠と朱子は解釈。寺というのは宦官のこと。君子、仁なる人は社会のリーダーシップをとる人なので、当然のことながら一般人を愛することが第一義。より完成された人なら、当然小人、一般人グループを愛する場合には、親が子にさせると同じく、すべてその子が出来るようにすること、そうしないではおられない。愛と忠が対になっており、忠に力点がある。愛はこの場合学問を愛す、学び習うことを好むという意味で、労すはいたわるでは次の忠ならば誨（おし）えるとは意味がつながらない。顔回は「勞を施すこと無し」と人をわずらわすことをしなかったが、孔子は好きな以上はどんどん苦労をさせる、わずらわす。まして忠、心からそう思うのであるからには、誨は諭して教えること、誨えないではおれようか、という孔子の強い気持ちをいう。

９）子曰為命裨諶草創之世叔討論之行人子羽修飾之東里子産潤色之

zǐ yuē wéi mìng pí chén cǎo chuàng zhī shì shū tǎo lùn zhī xíng rén zǐ yǔ xiū shì zhī dōng lǐ zǐ chǎn rùn sè zhī
子の曰はく、命を為すに、裨諶、之を草創し、世叔、之を討論し、行人子羽、之を修飾し、東里子産、之を潤色す。

鄭國で辭命を爲るに、四人の大夫の役割を孔子が述べている。裨諶（ひじん）は謀に優れており、静かな郊外で謀るとうまくいったが、さわがしい城内ではうまくゆかなかった。 そこで子産は裨諶と一つ車に乗って郊外に出かけてことの良し悪しを考えさせて外交問題を処理した（[列伝 ヒ](http://www.h3.dion.ne.jp/~china/HUMAN6I.HTML)）。草は略すこと、草創は草稿をつくること。方針を彼が定めた。世叔（せいしゅく）、は諡（おくりな）、游吉、春秋傳に太叔とある。討は尋ね究むこと、論は講議すること、討論は部下と意見を交わして、問題点を整理し論旨を明確にすることであろう。行人とは、使を掌るの官、外交官の長、子羽は公孫揮（こうそんき）のこと。修飾は增損するを謂う、敗事有ること鮮（すくなく）し、外交上の損を避ける配慮を加へる。東里とは場所、子産の住む所、潤色とは、加うるに文采を以てするを謂う、君命としての体裁を整へ、相手を尊重しつつも、要求すべきを要求するものに子産が仕上げた。鄭國の政治が非常に上手く運営されていた頃の話である。國を運営する、善き政治を行う志があれば、他人を労してでも善きものを求め、忠の志あるが故に、お互い諭し教え合うことが出来る。己が己の賢才を誇れば、そうはゆくまい。孔子の門下もかくあらねばならぬ、と上の句に関連をもたせる配置となったのであろうか？

読書会：夏目漱石の小説「[行人](http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/775_14942.html)」はここからきている。

10）或問子産子曰惠人也問子西曰彼哉彼哉問管仲曰人也奪伯氏駢邑三百飯疏食沒齒無怨言

huò wèn zǐ chǎn zǐ yuē huì rén yě wèn zǐ xī yuē bǐ zāi bǐ zāi wèn zǐ xī yuē bǐ zāi bǐ zāi wèn guǎn zhòng yuē rén yě duó bó shì pián yì sān bǎi făn shū sì mò chǐ wú yuàn yán
或、子産を問ふ。子の曰はく、惠人なり。子西を問ふ。曰はく、彼哉彼哉。管仲を問ふ。曰はく、人なり。伯氏より駢邑三百を奪ふも、疏食を飯ひ、齒を沒へて怨言無し。

或る人が先生に子産を問ふた。先生は惠人といふ。[公冶長篇16）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)に「子、子産を謂ふ。君子の道四つ有り。其の己を行ふや恭、其の上に事うるや敬、其の民を養ふや惠、其の民を使うや義」其養民也惠、民の惠を心に抱いて政治をされた。子西は史記に、「昭王、將に以て書社の地、七百里（1万７千5百戸の土地）を孔子に封じむとす。楚の令尹（れいいん：宰相）、子西（しせい）曰く、｢王の諸侯に使（者）をせしめて子貢の如き者有るか。｣曰く、「有ること無し。」「王の輔相（補佐する大臣）に顔回の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」「王の將率（大将）に子路の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」“王の官尹（官吏）に宰予の如き者有るか。」曰く、「有ること無し。」「且つ楚の祖、周に封ぜらる。子男（しだん：爵位）と號して五十裏（里）（楚の祖も最初は五十里四方の国）。今、孔丘、三五之法（三皇五帝の政道）を述べて、周（公）召（公）之業を明（あきらか）にす。王、若（も）しこれを用ゐなば、則ち楚、安ぞ、世世堂堂として方數千里を得むか。夫れ文王、豐に在（ま）し、武王、鎬に在し、百里之君、卒ひに天下を王す（百里之君がついに天下を治めた）。今、孔丘、土壤（七百里）に據（よる）を得て、賢弟子、（補）佐さば、楚の福に非ざるなり（庇を貸して母屋をとられる）。」昭王、乃ち止む。」とある楚の子西とされる。或る人はこのことを知って問ふたのであろう。先生は、あの男か、あの男か、と言ふのみで何も応えられなかった。やはりなあ、と或る人も思ったことだろう。本命の管仲について問ふた。管仲は、器が小さい、倹約をしない、禮を知らない、とあった[八佾篇22）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)。この篇17）、18）にも登場する。管仲は、「貧乏であった友の鮑叔の紹介で、公子糾の補佐役となるが糾は管仲の才能を見抜けず、王位継承争いで鮑叔が補佐する公子小白（桓公）に負ける。この時、召忽は殉じて死ぬが管仲は死なず、鮑叔の推薦で桓公は管仲を用ゐて覇業を成し遂げる。管仲は、自らは不幸な境地にありながら、自分の周囲の人々には福を与えるという天分があったとされ、また、貧しかったときの苦労を忘れず、常に国を富ませることに心を砕いた。」とされる。人なり、とは人物だなあ。さて、集註は、「桓公は、伯氏の邑を奪ひ管仲に與へた。」、駢邑三百のことであるが、管仲が奪った訳ではなかったといふ。義疏は、宰相として管仲が、罪を犯した伯氏から書社三百を削いだと記している。伯氏は、疏食を飯し、齒（とし:年）を沒（お）へて怨言（うらみごと）を言はなかった。集註は、「伯氏自ら己が罪を知りて、心管仲が功に服す。故に窮約し以て身を終えるも、怨言無し。」とする。伯氏も立派であるが、心が管仲に服していることに力点がある。自らの貧を忘れぬ管仲が伯氏に心を砕いていたことを伯氏も知っていた。八佾で管仲を批判していた孔子は、実は彼を高く買っていた。

読書会：或る人とは誰かは当時の人には分っていた、今となっては分らないが。論語のなかで、管仲ほど評価の変わる人は他にいますか？

11）子曰貧而無怨難富而無驕易

zǐ yuē pín ér wú yuàn nán fù ér wú jiāo yì
子の曰はく、貧しくて怨み無くは難し、富みて驕る無きは易し。

これは、前段の管仲を想起せしめる。彼は、富みて驕ること無きのみならず、貧しくて怨無かった。それが伯氏をして怨言無からしめ、孔子をして、管仲を、人なり、と言はしめたところであろう。

読書会：貧しくて怨み無くは難しは伯氏。貧しくして怨むこと無き、といえば伯夷、叔斉。貧しくして怨むこと無きは難し、は分るが、富みて驕ること無き、も同じくらい難しい。精神面、金銭面で余裕のある人が知らずに、意識をせずして、人を傷つけるということが起こっている。それをうまく包み隠そうとしても、むつかしい。現代社会はそうなってきている。

12）子曰孟公綽為趙魏老則優不可以為滕薛大夫

zǐ yuē mèng gōng chuō wéi zhào wèi lǎo zé yōu bù kě yǐ wéi téng xuē dà fū
子の曰はく、孟公綽、趙、魏の老と為せば則ち優かならん、滕、薛の大夫と為すべからず。

孟公綽は、春秋左氏傳、「襄公二十五年、春、齊の崔杼師を帥いて我が北鄙を伐つは、以て孝伯の師に報ゆるなり。公之を患え、晉に告げしめんとす。孟公綽曰く、崔子將に大志有らんとす。」に記されている。魯では崔杼率いる斉軍が北辺に侵入し、公が患えるも、孟公綽は崔杼に大志（弑君）ありて、すぐ立ち去るから心配するに及ばずと言ひ、果たしてそうなった、と伝へている。同篇13)に孟公綽の不欲とあり、賢人で不欲の人とされる。趙、魏は晉（大国）の卿の地、その老とは家老、大国家老は寛閑。優（ゆたか）は「寛緩有餘裕也（義疏）」。滕、薛は小国、小国では「賢人小、其職煩雜（義疏）」。小国では大夫は何でも自分でしなくてはならず、孟公綽にはそういう才能はない。しかし、下に人材がおり、それにゆったりと任すことができる環境ならば、全体を余裕をもって治めることができる、と先生は申された。

読書会：趙、魏は晋の中の有力な貴族、趙、魏、韓の二つで、晋の力が弱くなるとそれぞれ独立する。晋にある半独立国家、国の中の家老レベル。逆に滕、薛は独立国であるが、領地は狭く重要ではない。趙、魏の宰相として出来るが小さな独立国では無理である。趙、魏の宰相として出来るなら滕、薛でも出来ると考えるのが普通だが、孔子は滕、薛では別という考え方。朱子の注釈によれば、大きな国より小さな国の運営はもっと難しい。

13）子路問成人子曰若臧武仲之知公綽之不欲卞莊子之勇冉求之藝文之以禮樂亦可以為成人矣曰今之成人者何必然見利思義見危授命久要不忘平生之言亦可以為成人矣

zǐ lù wèn chéng rén zǐ yuē ruò zāng wǔ zhòng zhī zhì gōng chuō zhī bú yù biàn zhuāng zǐ zhī yǒng rǎn qiú zhī yì wén zhī yǐ lǐ yuè yì kě yǐ wéi chéng rén yǐ yuē jīn zhī chéng rén zhě hé bì rán jiàn lì sī yì jiàn wēi shòu mìng jiǔ yāo bú wàng píng shēng zhī yán yì kě yǐ wéi chéng rén yǐ
子路、成人を問ふ。子の曰はく、臧武仲の知、公綽の不欲、卞莊子の勇、冉求の藝の若き、これを文なすに禮樂を以てせば、亦、以て成人となすべし。曰はく、今の成人は、何ぞ必しも然らむ。利を見て義を思ひ、危を見て命を授く、久要、平生の言に忘れざる、亦、以て成人となすべし。

成人とは、よく出来た人とされる。臧武仲は同篇15）に言及される。公綽は先にみた孟公綽。卞莊子の卞は孟孫氏の領地、春秋左傳、襄公十六年（BC557年)秋、「斉候（霊公）は成を包囲した。孟孺子（もうじゅし、孟荘子、仲孫速）が斉軍に斬り込むと、斉候は言った。『この男は勇名を欲している。ここを立ち去って名を成してやろう』」の孟荘子とされる。冉求は孔子の弟子。知、不欲、勇、藝のみではまだまだ、禮樂を以て文（あや）なす、とあり前半は質の部分。子路は質では成人であるが、文では足りない、といふのが孔子。しかし、今の成人は、そうではなくなっている。見利思義とは利益を前にして義を思ふ。見危授命とは危険を前にして命を投げ出す、久要とは旧い約束、平生は平日、久要不忘平生之言とは、旧い約束を日常の言葉に忘れない、亦、成人といふべし、とみている。是の忠信の實有るときは、則ち其の才知禮樂、未だ備わらざる所有りと雖も、亦以て成人の次とす可きなり。この言は子路の言なり、とする胡氏の説をも集註は紹介しており、朱子も考えるところ定まらなかったのであろうか？文質彬彬と比較すれば雲泥の差がある。利と義、危と命、久要と平言の対比での認識は、孔子の認識とは異なる。亦可以為ｘｘ矣、それでもまたｘｘとなすのか、といふ嘆息のごときものを感じさせないか。

読書会：文°（去声）はwèn で動詞、。文（平声）wénは名詞、文章の意味だが、もともとは飾り、文様のこと。動詞では、かざる、あやなす、飾りを付ける、あやをつけるとなる。禮樂をもって飾りをつけたら、その人は成人、完全な人といってよい。久要の要は要°（去声）はyào で動詞、必要とする。。要（平声）yāoは名詞、要求の要、ここでは約束の意味、久しい約束、ずっと前の約束。平生の言、平生とは今より前の時間、それまで以前に言っていた事を、それを忘れない。それであれば、成人でよい。前段の答えでは、しまった、これでは子路が勘違いをする恐れがある、あまりにも理想が高すぎる、後段では、古の聖人ならそうだが、今じゃそういうことでなくてもいいなあ、人として基本的なことが出来ておればよいのではないかと言直した。成人は政治に携わるときに理想的な人は何か・・・知、不欲、勇、藝プラス禮樂を備えたのが完璧な政治家の資質。後段のところは今の子路にできること、子路に合わせて、こういう資質があれば、いい政治家になれると方向を教えた。

14）子問公叔文子於公明賈曰信乎夫子不言不笑不取乎公明賈對曰以告者過也夫子時然後言人不厭其言樂然後笑人不厭其笑義然後取人不厭其取子曰其然豈其然乎

zǐ wèn gōng shū wén zǐ yú gōng míng jiǎ yuē xìn hū fū zǐ bù yán bú xiào bù qǔ hū gōng míng jiǎ duì yuē yǐ gào zhě guò yě fū zǐ shí rán hòu yán rén bú yàn qí yán lè rán hòu xiào rén bú yàn qí xiào yì rán hòu qǔ rén bú yàn qí qǔ zǐ yuē qí rán qǐ qí rán hū
子、公叔文子を公明賈に問ひて曰はく、信なるか、夫子は言はず、笑はず、取らずか。公明賈對へて曰く、以て告し者過つなり。夫子、時にして然る後に言ふ。人其の言を厭はず。樂しみて然る後に笑ふ。人其の笑ひを厭はず。義にして然る後に取る。人其の取を厭はず。子の曰はく、其れ然り、豈に其れ然らむや。

公叔文子は衛の大夫、公叔発。文は諡。呉国の太子、季札が衛国を訪れた時、遽伯玉、史狗、史鰌、公子荊、公叔発、公子朝に会い、「衛に君子多し。未だ患え有らざるなり。」と言ったという話が春秋左氏傳、襄公29年条に記されている。公明賈も衛人、孔子が衛に行った時、仕官に際しての準備で、公叔発の人となりを、確かめておく意味があった。公叔発は物を言はず、笑はず、物を受け取らないと聞くが本当であるか？それは告げた人が間違っていると言ふ。時不可失は潮時を逃がしてはいけない。時然後言人不厭其言とは、ここで言って欲しいと思うところで言うから人が厭がることはない。樂然後笑人不厭其笑は人が楽しそうにしているから笑うので人がその笑ひを厭がらない。やるべきことをやって物を受け取るので人はその収受を厭がらない、と応える。先生はそうですか、でもどうしてそういえるのだろう？といぶかられた。豈は強い反問を示すことば。公叔文子は霊公にねたまれるほど富者であったとされ、不言不笑不取でどうして富者となるのか確認してみれば、逆に時宜を心得て言笑取、義然後取といふが本当か？と公明賈に返された。

読書会：朱熹は蓋し之を疑うなり、とし軽い否定、疑問の否定。8～9割は反語であるが、疑問詞とも読める。言われたことはそうでしょう、と、ところが本当にそうなんですかという二つの気持ちがある。否定。それは聖人のやること、と反問している。孔子は評価を知っていて疑念をもって聞いている。最後はそうですか？という疑問形。孔子にこう言われて、公明賈は物が言えなくなった。世間が作った言葉、それを公明賈がおきまりの言葉のように言っている。本質的に公叔文子が出来ているかとなれば、むつかしいこと。おそらく孔子は公明賈が当然そう言ってくると思っていた。家来のそういう態度をみれば、公叔文子のことも分かる。孔子が本当にそうか、言うと先が続かなくなる。続かなければ、結局はそれまでのことと分かってしまう。待ち構えていたのは、公明賈も同じ、また、聞いてきたなと応じたのであろう。

15）子曰臧武仲以防求為後於魯雖曰不要君吾不信也

zǐ yuē zāng wǔ zhòng yǐ fáng qiú wéi hòu yú lǔ suī yuē bù yāo jūn wú bú xìn yě

子の曰はく、臧武仲、防を以て後を魯に為てんことを求む。君を要せずと曰ふと雖も吾信ぜざるなり。

春秋左傳、襄公二十三年（BC550年)に臧武仲（魯の大夫、名は紇）の一件が記されている。季孫の怒りを買って、邾に亡命した臧武仲が封邑の防に赴き使者を送り、「『紇には人を害ねる力もないのに、思慮の足らぬ行動をいたしました。個人のためのお願いではございません。もしも、先祖の祀りが続けられ（祖父と父）二代の勲功が廃されることさえなければ、防邑から立ち去ってもかまいません。』そこで臧為を後嗣に立て、臧紇は防を差し出して斉に逃げた。（岩波文庫）」とある。集註には、「邑に據りて以て叛かんとするを示す。是れ君を要するなり。」と防を占拠して君を強要して後継者を為（た）てたとする。左傳の記述には、君を要した様は見られない。亡命をしており、防は魯君の管轄下にあったとされ、赴くとはいえ一時的に占拠したのであろうが、改めて防を差し出すから後嗣に祖先の祭祀をさせてくれと謙って要求を出し、自分は逃げ出している。これが強要にあたるか疑問がある。左傳の記述に孔子は異を唱えていることになる。では、一体、臧武仲の知とは何か？先祖の祭祀を絶やさないという禮をたてに、人を害する力もないと武力を偽り、君の管轄下の邑を占拠をしておきながら、事実上君に後継を強要しておきながら、親孝行物語にすりかえた知恵、とでもなるのか？亡命してきた臧紇に斉候が田土を与えようとする。斉候に謁見し、候が晋攻撃の話をすると、「『戦果が多かったのはたしかですが、でも貴君のやり方は鼠に似ておられる。鼠というやつは昼は隠れて夜に動きまわるが、宗廟の壁には穴をあけない。人を畏れるからです。しかるに今、貴君は、晋に乱ありと聞けば兵を起し、落ち着けば奉仕しようとなさる。まるで鼠そっくりです。』そこで（斉候は怒って）田土を与えなかった。仲尼（孔子）の評。知恵というのは曲者だ。臧武仲（臧紇）のように〈斉の禍難から身を避ける〉知恵があっても、〈生国の〉魯では容れられなかった。思うにそれには理由がある。やることが〈年長を立てる〉順序に従わず、〈廃された者への〉思いやりが欠けていたからだ。【夏書】に『為さんとすればここに在り』（大禹謨）とあるのは、順序正しく、思いやりあれということだ。（岩波文庫）」斉候を怒らせ田土を賜る難を避ける、が臧紇の知恵と孔子は見ている。年長順、思いやりが欠けるについては、同二十三年の季氏の宴席で臧紇が年長の公鉏を待たせ季孫を含め大夫一同を愕然とさせた一件のこと。実は、季孫から年下の悼子（とうし）を後継ぎにする相談を受けた臧紇が公鉏を軽く扱うため仕組んだ芝居であったが知恵といふよりひんしゅくを買った。

読書会：前回では臧武仲の知、知恵者の代表として出ていた。一方では知力を認め、ここでは批判をしている。押さえている土地を、そこを根拠地としてやるとちらつかせて、ある意味では力を使う。このやりかたをここでは厳しく批判をしている。個別の事案では批判しているところが面白い。

16）子曰晉文公譎而不正齊桓公正而不譎

zǐ yuē jìn wén gōng jué ér bú zhèng qí huán gōng zhèng ér bù jué

子の曰はく、晉の文公譎りて正しからず、齊の桓公正しくて譎らず。

譎（いつはり）はたくらみを持ち、人をだますこと。晉の文公（BC636-628在位）が譎で不正、齊の桓公（BC685-643在位）が正で不譎とは文公を悪く言ったものである。史記、晉世家に曰く、「晋候は諸侯を温に会し、これを率いて周に朝せんと欲するも、力いまだ能はず。その畔（そむ）く者有るを恐れ、乃ち人をして周の襄王に言ひ、河陽に狩せしむ。壬申、ついに諸侯を率いて王に践土に朝す。孔子、史記を読み、文公に至りて曰く、『諸侯、王を召すなし。王河陽に狩すとは、春秋これを諱（い）めるなり。』」覇者となった文公が、周に朝せず、河陽に周王を呼びつけた。それを狩と偽はった。正しからず。司馬遷はそう解釈した。しかし、齊の桓公は葵丘の会盟に周の襄王から臣下の作法抜きで賜物を受けようとして管仲に止められ、泰山で封禅の祭りをしようとして管仲に止められるなど、人としては苦労人の文公に比しては、驕慢なることはこのうえない。覇者として天命を得たいという自分の野望を不譎は理解できるが、何故孔子は桓公を正しいとしたのか？管仲の言に従い尊王攘夷を通したことを評価するのは分かるが、管仲の死後、その政治は乱れた。

読書会：譎は朱熹は詭、詭計、いつわりの計、詭弁、騙くらかしてうまく物事を進める。文公は計略を用いて正しくなかった。桓公は正しくやった。桓公をほめている。文公をマイナス評価した。古注では、詐也、とする。ぼくはそういう読み方をしたくない。孔子は褒めた人物を次では批判する。両面をみて評価する。単に褒めるだけではおかしい。晉の人達はこれを権也、と読む。権謀の権。権だと事情が異なる。可適也不可与権、権は物事をうまく運ぶ、機転を利かすことが出来る。晉の文公は機転を利かし、正しくなかった。齊の桓公は不正はしなかったが機転を利かすことが出来なかった。二人の長短をみている。正、不正と文中にあり、そういうことはいいにくい。孔子と違うところを一般人が評価していることに不満があった。孔子は桓公を評価した。それは違うと子路や子貢が反応する。当時は両方ともすごく評価していたが、それを見分ける必要がある。分けるには、正、不正で分けた。

17）子路曰桓公殺公子糾召忽死之管仲不死曰未仁乎子曰桓公九合諸侯不以兵車管仲之力也如其仁如其仁

zǐ lù yuē huán gōng shā gōng zǐ jĭu shào hū sǐ zhī guǎn zhòng bù sǐ yuē wèi rén hū zǐ yuē huán gōng jiǔ hé zhū hóu bù yǐ bīng jū guǎn zhòng zhī lì yě rú qí rén rú qí rén

子路が曰く、桓公、公子糾を殺し、召忽之に死す。管仲、死せず。曰く、未だ仁ならざるか。子の曰はく、桓公諸侯を九合して、兵車を以てせざるは管仲の力なり。其の仁に如かむ、其の仁に如かむ。

斉の襄公は臣下を殺し、女に手を出し、大臣を辱める暴君で、弟の糾は母の里、魯へ亡命、召忽と管仲が従った。小白（後の桓公、母は衛出身）は莒に逃れ、鮑叔が従った。二人が後継を争うことになり、莒から帰る小白を待ち伏せて、矢を腹に射かけたのが管仲、死者を装って油断した糾一行より先に斉に帰り、即位して桓公となった。魯に糾を殺し、召忽と管仲を引き渡すことを桓公は要求し、糾は殺され、召忽は自殺したが、管仲は斉に引き渡された。曰未仁乎の主語は誰か？子路ではなく、世人であろう。世間は管仲の行為を仁とはみていなかった。乎は疑問あるいは反問の語気をあらわす詞。結果的に、子路も、これでは仁とは言えないと問ふたことになる。孔子は[八佾篇22）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)において、管仲之器小哉となし、倹約もしないし、禮も知らないと酷評しており、子路は孔子が管仲を仁者とみなすことはないと思っていたのだろう。ところが孔子は如其仁を二度繰り返された。朱子は最初を疑問形、二度目を肯定形とみなした。孔子が管仲を仁者とみなしたことには、弟子たちにも議論があった。

鮑叔は桓公に斉一国を治めるには自分で十分であるが、覇者となるには管仲が必要と進言、桓公はそれを容れ、諸候の会盟を九度行う覇者となったが、兵車は周室を守ることに用いても周を脅かすことをしなかったのは管仲の力であった。会盟を行うに武力を用いないとする説もあるがどうか。如其仁如其仁、集註は、「其の仁に如かんやは、誰か其の仁に如く者あらんやと言う。又再び言いて以て深く之を許す。蓋し管仲未だ仁人爲るを得ずと雖も、而して其利澤人に及べば、則ち仁の功有り。」とする。しかし、孔子は管仲の仁に如かず、と高く評価した。子貢もこの点釈然としないものがあり、次の問ひが記録された。

読書会：子路が、未だ仁ならざるかと聞いた。ここで曰がもう一度でている。解釈としては、子路が一度話し終わってからもう一度話した。あるいは、子路の科白の一部としてみることもできる。その可能性としては、論語の編纂者が、その前に一呼吸をおくために入れたと考えられる。未だ仁ならざるかは否定詞だが、不仁ともできるが、不仁は悪いこと、全否定となる。未仁は部分否定、仁とはいえないくらい、そういう点においては仁とはいえないのではないか、と聞いた。それに対して先生は、桓公は諸侯を九（ただ）し合せて、朱子は九jiǔを糾jiū、糾合の糾、まとめて合わせるの意味、諸侯をまとめあげた、とみる。その方法として、兵車を使わない、兵車とは戦争に使う車、普段の車は乗車、当時は諸侯が集まり盟約を結ぶとき、牛の耳を切りその血を互いにすする、ここから牛耳るという言葉が生まれるのですが、会合の方法には二つあり、戦車、兵車で集まる場合と、乗車の場合があり、ここでは管仲は兵車を以ってせずですから、乗車でまとめたとなる。孔子が仲弓のことでは仁であるといっても口が上手くない、と批判を受けたごとく、当時仁は軽いものであった。孔子は基本的なところで、仁をもちあげたかった。子路が聞きたかったのは、仁がどういうものであるかを、管仲をもってきて、あえてアラを指して、こういうことがあるが仁でありますまいかと聞いた。孔子は、その聞き方は管仲の全体像を見ていない。その点では仁であるとしたが、多分子路が聞こうとしたことに答えてはいない。孔子の管仲に対する評価が今まではとは明らかに違ってきているのを聞いて、子路が欠落している部分は飲みこめないままにも、仁というのはひょっとして、こんなことなのか？という気持ちが心の中にありながら、未仁乎、これは私には仁とは思いにくいですが、ひょっとしたらこれが仁なのですか？と聞いたような。それに対して、孔子も子路分かってくれたか？そうなんだよ、これこそ仁なんだよ、というニュアンス。子路が答えを引き出している。

18）子貢曰管仲非仁者與桓公殺公子糾不能死又相之子曰管仲相桓公霸諸侯一匡天下民到于今受其賜微管仲吾其被髮左衽矣豈若匹夫匹婦之為諒也自經於溝瀆而莫之知也

zǐ gòng yuē guǎn zhòng fēi rén zhě yú huán gōng shā gōng zǐ jiū bù néng sǐ yòu xiàng zhī zǐ yuē guǎn zhòng xiàng huán gōng bà zhū hóu yī kuāng tiān xià mín dào yú jīn shòu qí cì wēi guǎn zhòng wú qí pī fà zuǒ rèn yǐ qǐ ruò pǐ fū pǐ fù zhī wéi liàng yě zì jīng yú gōu dú ér mò zhī zhī yě

子貢曰く、管仲仁者に非ざるか。桓公公子糾を殺し、死ぬこと能はず、又これを相く。子の曰はく、管仲桓公を相け諸侯に霸し、一に天下を匡し、民、今に到るまで其の賜を受く。管仲微かりせば吾其れ髮を被り衽を左にせん。豈に匹夫匹婦の諒を為すや、自ら溝瀆に經れて之を知ること莫きが若くならんや。

今度は子貢が確認を迫った。管仲は非仁者與、仁者に非らざるか？非は是の反、間違いとする、正しくないとする。仁者とするのは間違い、正しくないのではないか、と真っ向から疑問を呈した。桓公が公子糾を殺したとき、死ぬことができぬばかりか、桓公を相（たす）けた。主人を見捨て、自分の能力を主人の敵のために用いた、それでも仁者か？仁者というのは間違いじゃないですか？と食い下がった。先生は違った。管仲は桓公を相け、諸侯に霸（は）し、一（いつ）に天下を匡（ただ）した。民、今に到り其の賜（たまもの）を受けている。管仲が微（な）かりせば、吾其れ髮（はつ）を被（こうむ）り衽（じん）を左にせむ。相とは宰相となること。集註は、「霸は伯と同じ、長なり。匡すは正すなり。周室を尊び、夷狄を攘（はら）うは、皆天下を正しうする所以なり。微は無なり。衽は衣衿なり。被髪左衽は、夷狄の俗なり」、とする。被髪はざんばら頭、髪を結い、冠を着けるのが習慣。左衽は衿を左前にして着ること、右前に着るのが習慣。夷狄の俗に染まらず今日中華の俗にあるのは管仲のおかげといふ。義疏に、「王弼曰く、戎狄交りて侵しし時に、荊を亡ぼし衞を滅す。管仲、戎狄を攘ひてこれを封ず。」とありそのために中国に恩恵がもたらされた。集註は、「諒は小信なり。經は縊るなり。之を知ること莫しは、人知らざるなり。」とする。匹夫匹婦の諒（まこと）を為す、とはこの場合、公子糾、召忽と共に、管仲が死ぬこと。溝は水路と水路の交わるみぞ、瀆は河と河の交わるみぞ、溝瀆とは、死ぬべき場所ではないたとえ（角川漢和中辞典）とある。溝瀆に自ら經（くび）れる、とは自分で首を縊（くび）り溝瀆で死ぬ、犬死であり、人に知られることもない。管仲は、そのようにすべきであったろうか？召忽は川に身を投げて死んだとされる、召忽が生きておれば名を汚したかもしれないが、管仲は汚名を受けたが仁をなした。孔子は、政治的な仁として、夏、殷、周に受け継がれた中華の伝統を守り、民の安寧を計ることとみていた。弟子や世人とそこが異なっていた。

読書会：当時上流貴族は一夫多妻だが庶民は一夫一婦。諒（まこと）をするとは、自分たちの愛情を証明する。自ら溝瀆に經（くび）れては、溝瀆は水路、川のこと、そこで首をくくる夫婦、一緒に首をくくる、誰もしらない間に、自分たちの愛情を証明するために首をくくって死ぬ、心中みたいなもの。そういうものとは違う、召忽が殉死したこと、殉死すべきことであったのか、下賤の者が心中するようなものでよくない。非仁者與は、仁者なんですね、だけどこんなこともありますよ、と孔子の潜在意識をくすぐっているとも読める。自分の才能でなく、国民を治めること、自分の知恵で政治を行うのでなく、民の生活をよくするという風なところ、堯や舜のようなことが評価の対象となっている。

19）公叔文子之臣大夫僎與文子同升諸公子聞之曰可以為文矣

gōng shú wén zǐ zhī chén dà fū zhuàn yǔ wén zǐ tóng shēng zhū gōng zǐ wén zhī yuē kě yǐ wéi wén yǐ
公叔文子の臣、大夫僎、文子と同じく諸を公に升す。子、これを聞きて曰はく、以て文と為す可し。

公叔文子は同篇14)に言及されていた衛の大夫、落としどころを心得た政治家で富者でもあった。家臣で大夫の僎（せん）を霊公の公朝に升（のぼ）す。陪臣から公臣になること。僎の才徳を見て己が臣にしておくことを恐れて霊公に推挙したところ、霊公が用いたといふ（義疏）。先生はこれを聞いて、申された。文と諡されてもっともだなあ。

読書会：同升之於公の之於が諸と発音されて、こうなっており、これを同じく公に升すの意味。大夫僎は階級としては実は大夫ではない。この人の場合、本名の上に大夫をつけるのは、僎先生という意味。僎という本名で呼ばれるのは、そんなに偉くない階級の人。自分の家の中の利益を求めるより国全体の利益のために、自分の部下を推薦したところを評価された。周の文王、武王にもあるごとく、よいことをしたものには「文」がつく、武力を行使したものには「武」がつく、武王の音楽は美を尽くすが善は尽くさないとされる。孔子はここでは最高の諡｢文｣を素直には認めていない、「文」としていいのではないか、くらいで管仲の時のように、手放しでほめているものではない。

20）子言衛靈公之無道也康子曰夫如是奚而不喪孔子曰仲叔圉治賓客祝鮀治宗廟王孫賈治軍旅夫如是奚其喪

zǐ yán wèi líng gōng zhī wú dào yě kāng zǐ yuē fú rú shì xī ér bú sàng kǒng zǐ yuē zhòng shū yǔ zhì bīn kè zhù tuó zhì zōng miào wáng sūn jiǎ zhì jūn lǚ fú rú shì xī qí sàng
子、衛の靈公の無道を言ふ。康子、曰く、｢夫れ是の如くして奚ぞして喪はざる。｣孔子の曰はく、｢仲叔圉、賓客を治め、祝鮀、宗廟を治め、王孫賈、軍旅を治む。夫れ是の如くして奚ぞ其れ喪はむ。｣

先生が衛の靈公の無道を歎じた。靈公に会うために、その夫人、南子に部屋で単独で会うことを余儀なくされ、馬車では南子と宦官の後ろに乗せられ市中を引き回され、仕官は中傷により破られ、身の危険を感じて衛を出た先生であった。季康子が、如是とは無道であること、それでどうして君位を喪（うしな）ふことがないのか？と突っ込むと、先生が申された。仲叔圉（ちゅうしゅくぎょ）が賓客を治め（外交応接し）、祝鮀（しゅくだ）が宗廟を治め（祭祀し）、王孫賈（おうそんか）が軍旅を治め(軍事す)るのであれば、如是、そういふことだからどうして君位を喪ふことがあろうか。仲叔圉は孔文子のこと、敏而好學不恥下問とあった（[公冶長篇15)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）。祝鮀は衛の祝官、祝鮀之佞といはれた（[雍也篇14)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）。王孫賈は晋の強圧に相対した大臣、與其媚於奧寧媚於竈といふ言葉を孔子になげかけた（[八佾篇13)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）、孔子は衛で仕官する予定があり、衛の人材については詳しく情報を収集していたし、実際に会って確かめることもしていた。
読書会：孔子は衛の霊公をくそみそに言っている。そもそも霊公の話をするのは、悪い見本を示して、何故国が喪びないかを季康子に尋ねた。家臣さえしっかりしておれば国は喪びない、季康子に立派な家臣を使いなさいと示した。ここでは孔子の適材適所の考え方がでている。季康子は孔子より若くて、孔子が放浪から魯に帰ってきたときの季氏の長、孔子とは活発に議論している。孔子が霊公のことを言うのを、うっとおしいなあ、いつまで続くのかと季康子は思っていた・・・。

21）子曰其言之不怍則為之也難

zǐ yuē qí yán zhī bú zuò zé wéi zhī yě nán
子の曰はく、其れ之を言ひて怍じざる、則ち之を為すや難し。

怍（は）じるとは、はじて心が動揺し、顔色が変わること（角川漢和中辞典）。慙、心にひやりとはずかしく思うこと、つらく感じる（角川漢和中辞典）に同じとされる。怍じる心なくして、ものを言うようでは、成し遂げることは難しい、といふこと。集註は、「大言を慙（は）じざれば、則ち必ず爲す志無くして、自ら其の能くせんや否やを度らざるなり。其の言を踐まんと欲せども、豈難からざらんや。」必ず成し遂げようとする志が無いから、大言を吐いて、それを成すこと無くも、慙じる心がない。次の話とかかわってくる。

読書会：古注では、内有其實則言之不慚　積其實者為之難也とする。内にその実が有れば則ちこれを言うこと慚じず、その実を積むはその難しさを実行する、為之也難はそれをすることは難しいとなる。新注（朱子）では自分を知らないことを怍じる、古注では自信のなさを怍じる。次条で孔子が哀公に不敢不告したことを其言之不怍とみれば、古注はつながる。

22）陳成子弑簡公孔子沐浴而朝告於哀公曰陳恆弑其君請討之公曰告夫三子孔子曰以吾從大夫之後不敢不告也君曰告夫三子者之三子告不可孔子曰以吾從大夫之後不敢不告也

chén chéng zǐ shì jiǎn gōng kǒng zǐ mù yù ér cháo gào yú āi gōng yuē chén héng shì qí jūn qǐng tǎo zhī gōng yuē gào fú sān zǐ kǒng zǐ yuē yǐ wú cóng dà fū zhī hòu bù gǎn bú gào yě jūn yuē gào fú sān zǐ zhě zhī sān zǐ gào bù kě kǒng zǐ yuē yǐ wú cóng dà fū zhī hòu bù gǎn bú gào yě
陳成子、簡公を弑す。孔子、沐浴して朝し哀公に告げて曰はく、陳恆、其の君を弑す。請ふ之を討つを。公の曰はく、夫の三子に告げよ。孔子の曰はく、吾、大夫の後へに從ふを以て、敢て告げざることなからむなり。君の曰はく、夫の三子者に告げよ。三子に之きて告ぐ。可ならず。孔子の曰はく、吾れ大夫の後へに從ふを以て、敢て告げざることなからむなり。

魯の哀公十四年（BC481）孔子71歳、顔回の死んだ年。左伝によれば、斉の簡公は魯にいた頃から、闞止（かんし：子我）を気に入り即位すると彼を執政にした。陳成子（陳常/陳恆）はこれを憚り、御者の鞅（おう）は、この二人（闞と陳）は並び立たぬ間柄ゆえ、どちらかを択ぶことを進言したが、公は容れなかった。陳一族は結束して公を攻め、救出に失敗した子我は殺され、公は舒州で捕らへられ、弑される。
孔丘は三日斎戒をして、斉を攻めることを三度請うた。哀公が「魯はこのところ斉によって弱体化している。子が攻めろと言うのには、何かの成算がおありか」と言うと、こう答えた。「陳恆は国君を弑したが、これに賛同せぬ民が半数はおります。魯の全員に斉の半数を加えれば、勝つことは可能です」　公は「季孫（季康子）に話してほしい」と言ったが、孔子はこれをことわり、退出して人に語った。「吾は大夫の末席に列なっているので、申し上げざるを得なかったのだ」と記述している。ここでは、孔子は沐浴して朝して哀公に、陳恆が君を弑したので、これを討つことを請うたとしている。隣国の公が弑されたのであれば、哀公が簡公にかわって、陳一族を討ち斉を正すべく、兵を挙げるべきもの。さもなくば、哀公自身が同じ目に遭いますぞ。かつて三氏（孟孫、叔孫、季孫三氏）の武装解除を図って失敗した孔子ではあるが。ところが哀公は、夫の三子にそれを告げてくれと言ふ。ここからは論語は左伝とは異なった見解となる。不敢不告はどうして（三子に）告げぬことがあろうか、いや告げる。大夫の末席の私が大夫の上席にいる三子に告げましょう！無駄とは分っているけれど。三子に哀公をたてて陳恆を攻め、正すことを之（ゆ）きて、告げたが、不可。二度繰り返して、孔子の曰はく、大夫の末席に居る以上、どうして告げぬことがあろうか、いや告げる。必ず成し遂げようとする志から申し上げている。そういふ政たらしめば周公の政が復興される。今、成らぬなら申し上げぬといふものではない。

読書会：[2008年9月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年9月20日)

23）子路問事君子曰勿欺也而犯之

zǐ lù wèn shì jūn zǐ yuē wù qī yě ér fàn zhī
子路、君に事つるを問ふ。子の曰はく、欺くこと勿くして、之を犯せ。

子路が君に事（つこうま）つるを問ふた。これは一般的な君といふより、この時期からすれば、子路が仕えた衛の出公であろう。犯は、顏を犯して諫め爭うを謂う、と集註にある。犯顏とは、君主がいやな顔をしてもかまわずいさめること。欺（あざむ）くはここでは、人をあなどってだますこと。出公は霊公の孫であり、年が少（わか）い、子路も、もう60歳にならんとする頃、苛々するところがあったのだろう。衛では孔文子が太子の蒯聵の姉を妻に迎え、孔悝（こうかい）が生まれ、孔文子が死ぬと、近習の美男子、渾良夫（こんりゅうふ）が未亡人の伯姫と通じた。渾と伯姫は、蒯聵と密約し、その帰国に協力する。この孔氏の屋敷の伯姫の許に女装して忍び込む形で蒯聵一行六人は衛に潜入し、孔悝を脅迫して抱きこもうとする。家老が出公を魯へと逃がしたが、孔悝は楼台に追い込まれる。それを救助で出かけ子路は命を落とす。結局、孔悝は蒯聵を立て国君とし、荘公となる。荘公は出公に仕えていた旧臣を排除した。こうならぬように、出公を欺いても、これらの動きを押さえてしまいたかったのかもしれない。しかし、先生は出公をあなどってだましてはならない。そのことを心して、若い君主が嫌な顔をしても、諌めよと申された。孔子は衛の乱を耳にしたとき、「由(子路)は死ぬだろう」と言ったと左伝は記している。左程にややこしい状況にあったと分かっていたといふなら、他に忠告する方法はなかったのだろうか？

読書会：[2008年9月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年9月20日)

24）子曰君子上達小人下達
zǐ yuē jūn zǐ shàng dá xiǎo rén xià dá
子の曰はく、君子は上達す、小人は下達す。

集註に曰く、「君子は天理に循う。故に日々に高明に進む。小人は人欲に徇（したが）う。故に日々に汙下に究まる。」義疏に曰く、「上達は仁義に達するなり、下達は財利に達するを謂ふ。君子と反する所以。」孔子曰く、君子も達す、小人も達す、しかし、君子は上に達す、小人は下に達す。君子には君子の小人には小人の住む世界がある。ならば、君子の世界とは？
読書会：[2008年9月27日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年9月27日)

25）子曰古之學者為己今之學者為人

zǐ yuē gǔ zhī xué zhě wèi jǐ jīn zhī xué zhě wèi rén
子の曰はく、古の學ぶ者は己の為にす、今の學ぶ者は人の為にす。

ここでは、為（な）すwéiでなく、為wèiであり、～のために、目的あるいは原因を表す。學ぶことは同じでも、為己、己のためにす、為人、人のためにす、昔と今はその差がある。古之學者が學んだものとは、先王之道とされる。己の未善、未熟を自覚し、それを學び、習ひて行ひ、己を治めることを求めた。これは丘の辿った道でもあった。しかし、貴族の子弟のための大学や、郷党での校といった教育機関、詩や書が整備され、學で身をたてることが出来る世が到来すると、學びて競い、仕官のためにその學を誇り、人に教へて徒党を組み、政治を動かすものがあらはれてきた。孔子とてその時世の申し子の一人であるが、自戒の念もお有りだった。學而時習之・・・人不知而不慍、これを忘れては、己を興すどころか、己を喪ふことになりかねない。君子たるには古之學者為己が必須と言ふ。
読書会：[2008年9月27日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai4.htm#2008年9月27日)

26）蘧伯玉使人於孔子孔子與之坐而問焉曰夫子何為對曰夫子欲寡其過而未能也使者出子曰使乎使乎

jù bó yù shÌ rén yú kǒng zǐ kǒng zǐ yǔ zhī zuò ér wèn yān yuē fū zǐ hé wéi duì yuē fū zǐ yù guǎ qí guò ér wèi néng yě shì zhě chū zǐ yuē shì hū shì hū
蘧伯玉、人を孔子に使はしむ。孔子、之と坐して、而してこれを問ひて曰はく、夫子、何をか為す。對へて曰く、夫子、其の過を寡なくせんと欲すも、未だ能はずなり。使者出ず。子の曰はく、使ひなるか使ひなるか。

孔子が蘧伯玉を評価したものであるが、蘧伯玉は孔子が生まれた頃に活動していた衛の大夫。孔子が56歳で魯を出て仕官すべく衛に行ったとき、また四年後に衛に戻ったとき、蘧伯玉の家に寄寓している。蘧伯玉は相当の老齢であったが、仕官しようとする孔子の人柄を確かめるために使者を送ったのであろう。孔子家語、困誓二十二に、「衛の蘧伯玉は賢なれども、霊公用ゐず。彌子瑕（びしか）は不肖なれども、反つてこれに任ず。史魚（しぎょ）はしばしば諫む。而れども（公）従はず。史魚病みて将に卒せんとす。その子に命じて曰く、『吾れ衛の朝に在り、蘧伯玉を進めて彌子瑕を退くる能はず。これ吾れ臣と為りて君を正す能はざるなり。生きてその君を正す能はずんば、即ち死して以て禮を成すなし。我れ死せば、汝、屍を牖（まど）下に置け。我れに於て畢れり』と（岩波文庫）。」霊公は後これを知り、悔いて彌子瑕を退け蘧伯玉を用ゐたといふ。淮南子に、「蘧伯玉、行年五十にして四十九の非を知り、六十にして六十化す。」ともある。その蘧伯玉が孔子をどう評価したかは触れられていないが、孔子はこの使者を通じて蘧伯玉は噂どおりの人物と実感したことであろう。與之坐はこれに坐（座）を与へて、と訓じる場合もある。而問焉、焉は“これ“、疑問を表す場合に用ゐられる。何為につながる。寡は少ないこと。其の過ちを更に少なくすることを実践しておられる。五十にして四十九の非を知る、とはまさに古之學者為己の実践。使乎使乎と二度感嘆された。
読書会：[2008年10月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月4日)

27）子曰不在其位不謀其政

zǐ yuē bú zài qí wèi bù móu qí zhèng
子の曰はく、其の位に在ざれば、其の政を謀らず。

[泰伯篇14)](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/taihaku.htm)に同文がある。読書会（2007年7月21日）では、季氏が魯で、君公にとってかわって政治をするようになった、それを言っている、と張さん。道が同じでないなら共に語るな、道が異なる国の政治に介入すべきではない。弟子に向かっての言葉で、その位にないのに、政治の事にでしゃばるな、君子思不出其位（易経）、中庸にも似た言葉がある。君子は自分の専門をしっかりとせよ。知らない事は聞くように、ということだ、と鄭さん、であった。

ここでは、前条の蘧伯玉と関連している。君子哉蘧伯玉邦有道則仕邦無道則可卷而懐之（衛霊公第十五）。左伝、襄公14年（BC559）に、「衛の孫文子は『君（衛献公）は我を嫌っておられる。先に手を打たねば殺される』と妻子を戚に引取り、衛都にもどって蘧伯玉に会い、『君の暴虐ぶりは、子もご存じのところ。社稷の転覆が大いに心配だ。どうなさるつもりか』と言うと伯玉は、『国君は国を制御するものなのに、臣下がそれを犯してよいのか。たとえ犯して<国君の廃位をやって>も、今よりましになる保証はないでしょう』と答えて立ち去り、最寄の関所から出国した。（岩波文庫）」とある。神や祖先を祭ることが、政の基本であり、それは、その子孫たる諸侯のみが行い得ることであった。しかし、周が衰え、諸侯が覇者となった春秋、大夫が宰相となり諸侯を動かし、一部の大夫が士を糾合し諸侯を廃する戦国となれば、政治において力が優先されてくる。それを、孔子はよしとしなかった。
読書会：[2008年10月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月4日)

28）曾子曰君子思不出其位

zēng zǐ yuē jūn zǐ sī bù chū qí wèi
曾子の曰く、君子、思いて其の位を出ず。

易の艮下艮上　艮為山(ごんいさん)
艮其背不獲其身。行其庭、不見其人无咎。
彖曰、艮、止也。時止則止時行則行動靜不失其時其道光明。艮其止、止其所也上下敵應、不相與也是以不獲其身、行其庭不見其人、无咎也
象曰、兼山、艮。君子以思不出其位

その背(せ)に艮(とど)まりてその身を獲ず。その庭に行きてその人を見ず。咎なし。
彖に曰く、艮(ごん)は、止(し)なり。時止まるべければすなわち止まり、時行くべければすなわち行き、動静その時を失わず、その道光明なり。その止に艮まるとは、その所に止まるなり。上下敵応して、相い与(くみ)せず。ここをもってその身を獲ず、その庭に行きてその人を見ず、咎なきなり。
象に曰く、兼ねて山あるは艮なり。君子もって思うことその位を出でず(岩波文庫)。とある。

曾子の言葉としている。「その静止し安定した山のすがたにのとって、君子は心を落ち着け、自分の地位をこえた欲心を起さないように心がける(岩波文庫)。」とある。

君子の側からすれば、在其位不出其位。（[里仁篇5)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)に君子無終食之閒違仁造次必於是顛沛必於是とあった。どんな時でも仁を違えぬ、学べば習い続けて身につけるという決意。君子であり続ける気構え、思不出其位は、思うことといえば、ひたすらその位（君子）でありつづけようとする心構え、これが大切ということではないか。その実践は以下のごとくせよ、となる。
読書会：[2008年10月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月4日)

29）子曰君子恥其言而過其行

zǐ yuē jūn zǐ chǐ qí yán ér guò qí xìng
子の曰はく、君子は其の言を恥じて、其の行を過ぐす。

集註は、「恥は、敢えて之を盡くさざるの意。過は、餘り有らんことを欲するの辭」とある。つまり、君子はその言を尽くさず、行ひに余りあることを欲す、行ひを大切にするとなろう。義疏は、君子は言を顧み、行ひを慎む。もし、言が空しく出で、行ひが遍（行き届か）ねば、これ言、その行ひに過ぐるなり。君子は之を恥ず、とある。子曰君子恥其言（之）過其行とするテキストもある。君子、其の言、これ其の行に過ぐるを恥ず、と読む。君子であり続ける努力をすることが大事であり、その言が自らの行動を裏切らぬようにする。言より行いの方に重きがあり、何を行ふかとなれば、以下の通り。
読書会：[2008年10月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月11日)

30）子曰君子道者三我無能焉仁者不憂知者不惑勇者不懼子貢曰夫子自道也

zǐ yuē jūn zǐ dào zhě sān wǒ wú néng yān rén zhě bù yōu zhì zhě bú huò yǒng zhě bú jù zǐ gòng yuē fū zǐ zì dào yě
子の曰はく、君子の道は三。我れ能くすること無からむ。仁者は憂へず。知者は惑はず。勇者は懼れず。子貢が曰く、夫子、自ら道ふなり。

[子罕篇28)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.htm)に子曰知者不惑仁者不憂勇者不懼とあった。これには、別伝があった。順番が異なるが、この三つは君子の道であるが、先生は我は無能、出来ていないとするも、この三つの行ひを挙げられた。先生も憂へ、惑ひ、懼れるところがあった。子貢はこれを聞いて、ええっと思った。自道の道は、ここでは言う、導く義、夫子（先生）自らおっしゃり、そう導いておられるのに、無能とはどういうことですか？先生は子貢にいいたいことがあった。言語宰我子貢([先進篇2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc))ということで、子貢は言語に秀でているた。先生の曰、「君子恥其言而過其行。」
読書会：[2008年10月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月11日)

31）子貢方人子曰賜也賢乎哉夫我則不暇

zǐ gòng fāng rén zǐ yuē cì yě xián hū zāi fú wǒ zé bù xiá
子貢人を方ぶ。子の曰はく、賜や賢なるかな。夫れ我は則ち暇あらず。

集註に、「方は比なり。乎哉は疑いの辭。人物を比方して其の短長を較ぶるは、亦理を窮むるの事なりと雖も、然れども專ら務めて此をするときは、則ち心外に馳せて、以て自ら治むる所の者疎かなり。」とあり。子貢は人を方（くら）ぶ。子貢は外交と貨殖に才を発揮する。相手の意図を例えをもって慎重に読み取る、物の動きを的確に捉え投機するセンスがあった。これは、孔子も及ばぬものがあった。諸侯のなかには、先生より子貢を高く評価するものがあった。司馬遷は、仲尼弟子列伝に、「子貢、廃挙を好み（商品を貯えること）、時とともに貨貲を転ず。喜みて人の美を揚げ、人の過を匿すこと能わず。」とみている。孔子は、その才を認めるものの、暇（いとま）あらず、それは自分のするべきことではないとされた。[顔淵篇13)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)で子路のごとく片言で訴訟を裁く才能はないが、訴訟を起こさせないような政をするとされたことに似ている。
読書会：[2008年10月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/rongodokushokai4.htm#2008年10月11日)

32）子曰不患人之不己知患其不能也

zǐ yuē bú huàn rén zhī bù jǐ zhī huàn qí bù néng yě
子の曰はく、人の己を知らざるを患へず。其の能はざるを患ふなり。

人不知而不慍不亦君子乎（[学而篇1）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）不患人之不己知、患不知人也（[学而篇16）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）とこの事にはこだわっておられた。ここでは、己に才の無いことを患（うれ）ふ。これは弟子を諭したものと思はれる。しかし、三桓子の武装解除に失敗したとき、魯を出ざるを得なくなったとき、衛で仕官できなかったとき、鄭で喪家之狗と称されたとき、荒野で窮したとき、自分より弟子の方が重宝されるとき等々、孔子への評価がかんばしくないときも多々あったであろう。その都度、失意のなかで己自身に言い聞かせておられた言葉の一貫でもある。
読書会：[2008年10月18日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月18日)

33）子曰不逆詐不億不信抑亦先覺者是賢乎

zǐ yuē bú nì zhà bú yì bú xìn yì yì xiān jué zhě shì xián hū
子の曰はく、詐を逆へず、不信を億らず。抑亦先ず覺る者、是れ賢か。

集註は、「逆は、未だ至らずして之を迎うるなり。億は、未だ見ずして之を意うなり。詐は、人の己を欺くを謂う。不信は、人の己を疑うを謂う。抑は反語の辭。言うこころは、逆えず億らずと雖も、而して人の情僞に於て自然に先ず覺るを、乃ち賢と爲すなり。」といふ。詐（いつはり）を逆（むか）へず、不信を億（おもんばか）らず、とはどういふことか？相手が己を欺くとしても逆らわない。相手が自分を疑っているのではないかと思いをめぐらさない、いわば、相手が言ふがままに受け容れること。実はそうすれば、結局相手は騙せなくなる。抑（そもそも）亦（また）先ず覺る者、是れ賢か。抑亦～乎の反語。そもそも、また、相手が欺ごうとしている、相手が自分を疑っていると先に覚ることが賢であろうか？そうではない。自然に騙せなくなるほうが賢といへよう。
読書会：[2008年10月18日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月18日)

34）微生畝謂孔子曰丘何為是栖栖者與無乃為佞乎孔子曰非敢為佞也疾固也

wēi shēng mǔ wèi kǒng zǐ yuē qiū hé wéi shì xī xī zhě yú wú nǎi wéi nìng hū kǒng zǐ yuē fēi gǎn wéi nìng yě jí gù yě
微生畝、孔子を謂ひて曰く、丘、何為ぞ是れ栖栖たる者か。乃ち佞と為すこと無からむや。孔子の曰はく、敢へて佞を為すに非ざるなり、固なるを疾むなり。

集註は、「微生は姓。畆は名なり。畆夫子を名乎して辭は甚だ倨（おご）れり。蓋し齒德有る隱者なり。栖栖は依依なり。佞をするは、其の務めて口給を爲して以て人を悦ばすを言うなり。疾は惡なり。固は、一を執りて通ぜざるなり。聖人の達尊に於る、禮恭しくして言直きこと此の如し。其の之を警せるも亦深し。」といふ。齒德は年長で徳のあること。栖栖は心の落ち着かないさま、依依は恋々とすること。口給は弁舌。祝鮀之佞（[雍也篇14）](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）の佞、弁舌巧みなこと、口達者ともされ、孔子は佞者を嫌った。無為～は、～を為すことなかれ。微生畝は孔子を丘と本名で呼び、心落ち着かず恋々として、佞を為すのはやめたほうがいいのじゃないか？放浪して政を説き、仕官のために弁舌をふるうことはやめたほうがいいのじゃないかと語りかけた。好き好んで佞をしているわけじゃない、と“自分は佞者ではない”という対応をせず、相手のことばを一応受け容れられた。一つにこだわって融通がきかないことを惡（にく）む、とは何か？誰が固なのか？政を説く相手、諸侯等、当時の政治家をいふのか？微生畝のような人間、隠者といはれる人達なのか？微生畝に貴方の方がかたくななのではありませんか、と返されたことになろうか。
読書会：[2008年10月18日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月18日)

35）子曰驥不稱其力稱其德也

zǐ yuē jì bù chēng qí lì chēng qí dé yě
子の曰はく、驥、其の力を稱さず、其の德を稱すなり。

義疏に、「驥（駿馬）は馬の上善なり。時に徳を輕じ、力を重くす。故に、孔子、譬を引きて言ふ、伯樂を言ひて曰く、驥は其の力に重き非ず、政は是れ其の美徳を稱すのみ、驥は既に此の如し、而して人、亦、宜然（当然）。江熙云く、伯樂を稱して曰く、驥は力有りて稱さず。君子、能有り兼ねると雖も、惟だ其の徳を稱するなり。」とある。集註は、「尹氏曰く、驥力有りと雖も、其の稱（ほまれ）は德に在り。人才有りて德無くば、則ち亦奚ぞ尙ぶに足らんや、と」ある。馬の徳とは何となるが、朱子は、「德は調良を謂うなり。」とする。調とはととのえること。政治は才でなく徳に重きがあるといふことになる。
読書会：[2008年10月18日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月18日)

36）或曰以德報怨何如子曰何以報德以直報怨以德報德
huò yuē yǐ dé bào yuàn hé rú zǐ yuē hé yǐ bào dé yǐ zhí bào yuàn yǐ dé bào dé
或、曰く、德を以て怨に報ひるは何如。子の曰はく、何を以て德に報ゐむ。直を以て怨に報ひ、德を以て德に報ひむ。

或るひとが、德をもって怨に報ひる、どうですか、と言った。先生は、じゃあ、何をもって德に報ひようか。德には德をもって報ひるものです、怨には直をもって報ひるべきでしょう、と申された。さて、或るひとは、「利に放（よ）って行うときは、怨多し。」の怨。対人的な怨。怨を受けたことに対して、怨を晴らすには、仕返し、復讐ではなく、徳をもって報ひるのはどうか、とでも問うたのであろうか？対人的な怨に徳をもって報いる、といふのは、先生はピンとこないので、じゃあ徳に対して何を報いるのかと、聞きたくなった。怨みに対する自分の素直な気持ちを省みることが先決じゃないか？先生の頭の中は、子貢が伯夷･叔齊について、「怨みたりや、と聞くと。曰く、仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みん。」の怨。諸侯が孔子が採用しないことへの怨、天が我を見捨てたという場合の怨。次の条と関連する。それは人知らずして温（いか）らずの問題。それに徳をもって報いるなんぞ意味をなさない。仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みん。これしかないでしょう。

読書会：[2008年10月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月25日)

37）子曰莫我知也夫子貢曰何為其莫知子也子曰不怨天不尤人下學而上達知我者其天乎

zǐ yuē mò wǒ zhī yě fú zǐ gòng yuē hé wéi qí mò zhī zǐ yě zǐ yuē bú yuàn tiān bù yóu rén xiă xué ér shàng dá zhī wǒ zhě qí tiān hū
子の曰はく、我を知る莫きなりか。子貢が曰く、何為れぞ其れ子を知る莫きなり。子の曰はく、天を怨みず人を尤めず。下學して上達す。我を知るは其れ天か。

夫fúは文末で詠嘆の言葉～かな。司馬遷、史記に曰く、「顔淵死す。孔子曰く、『天、予を喪ぼせり。』西の狩に及びて麟を見、曰く『吾道に窮せり。』喟然として歎じて曰く、『我を知る莫しか。』子貢曰く、『何ぞ子を知る莫しとなす。』子曰く、『天を怨まず、人を尤めず。下學し上達す。我を知る者は其れ天か。』」また、｢『君子は世に没し、名を称せられざるを病む。吾が道行われず。吾何を以て自ら後世に見ゆるか。』すなわち史記に因りて春秋を作る。｣自分を分かってくれる者がいないとつぶやく先生。晩年で顔回すでに無く、政治にも距離をおき、春秋に傾注しておられる先生を見つめる子貢。先生を知ることが莫いからといって何為？知らない方に問題があり、先生がなさるべきことは何も無い。「天、私を喪（ほろ）ぼせり。」、「苟も我を用ゐる者有らば、期月のみ可なり、三年にして成ること有り。」と怨みがましいことを言った。怨むべきは天に非ず、尤（とが）むべきは他人に非ず。學を求めて學を得たり、又何ぞ怨みん。そのことは天が知ってくれようか。断定できかね、乎と疑問を付された。
読書会：[2008年10月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年10月25日)

38）公伯寮愬子路於季孫子服景伯以告曰夫子固有惑志於公伯寮吾力猶能肆諸市朝子曰道之將行也與命也道之將廢也與命也公伯寮其如命何

gōng bó liáo sù zǐ lù yú jì sūn zǐ fú jǐng bó yǐ gào yuē fū zǐ gù yǒu huò zhì yú gōng bó liáo wú lì yóu néng sì zhū shì cháo zǐ yuē dào zhī jiāng xíng yě yú mìng yě dào zhī jiāng fèi yě yú mìng yě gōng bó liáo qí rú mìng hé
公伯寮、子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て告げて曰く、夫子、固より公伯寮に惑へる志有り。吾力猶能く諸を市朝に肆さむ。子の曰はく、道の將に行はれるや命なり、道の將に廢れるや命なり。公伯寮其の命を如何。

集註に、「公伯寮は魯人。子服は氏。景は諡。伯は字。魯の大夫の子服何なり。夫子は季孫を指す。言うこころは、其の寮の言に疑（まど）わされる有るなり、と。肆は尸を陳（の）ぶるなり。寮を誅せんと欲するを言う。」とある。義疏に、「愬は譖（そし）るなり。子路、時に季氏に仕へ、伯寮、季氏に讒し、讒（ざん）を信じしめ子路を譖るなり。亦、是れ孔子の弟子にて、其の家魯に在り。故に魯人の弟子と云ふなり。子服景伯、伯寮が子路を譖るを聞きて、故に、孔子に告ぐ、此の景伯の告す所の辭。夫子は季孫を夫子と爲すなり。惑志は季孫が伯寮の子路を讒すを信じるを謂ふなり。景伯既に孔子に告げて云ふ、季子猶惑志有り、而して又此れ子路を助くを説く、子をして無罪を略（はか）り、而して伯寮、死に致らしむ。･･･殷の禮、大夫を殺すは朝に已上し、士を殺すに市においてす、殺し猶、其の尸を陳曝し以て百姓に示して曰く、肆なり」とある。孔子の弟子であった公伯寮が子路を季孫に愬（うった）ふ。魯の大夫であった子服景伯は孔子に告げてこう言った。「夫子（季孫）には固より公伯寮に対して惑志がある。吾が力、猶、諸（公伯寮）を市朝に肆（さら）すことはできる。」孔子は季氏の宰となった子路をして季氏を含め、三桓子の武装解除を進めていた。公伯寮がそれを季桓子に讒訴し、季桓子も惑志があった。公伯寮に対する惑志とは逆からいえば、子路、その背後の孔子への疑念もあった。子服景伯はそこを恐れて、公伯寮を殺してしまったほうがよいと進言したことになる。しかし、孔子の答えは、道が行はれるかどうかは（天）命である。道の廢（すた）れるも（天）命である。公伯寮が其の（天）命をどうできようか？叔孫氏の郈、季孫氏の費の武装解除には成功するが、孟孫氏の宰、公斂処父（こうれんしょほ）が成を武装解除すれば斉から北門を容易に落とされ、孟孫氏が滅びると警告し、拒み、叔孫氏、季孫氏が同調しこの企ては失敗し、孔子が魯を去ることになる。陽虎の政権奪取に懲りた三桓子は、斉との外交交渉で手腕を発揮した孔子が定公を中心とする政治の復興を行ふのに、陽虎と異なり評価をしていた。しかし、魯が強国となることを恐れたのは斉ばかりでなかった。三桓子も封じ込まれる疑念を抱きながら、孔子に同調していたのであるが、公斂処父がそれを食い止めたことになる。実に陽虎を魯から追い出したのも、成から軍を繰り出した公斂処父であった。鍵を握っていたのは公斂処父、公伯寮ではなかった。その意味では孔子の判断はずれてはいまい。だが、天命は孔子の企てには失敗を用意していた。
読書会：[2008年11月1日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月1日)

39）子曰賢者辟世其次辟地其次辟色其次辟言子曰作者七人矣

zǐ yuē xián zhě bì shì qí cì bì dì qí cì bì sè qí cì bì yán zǐ yuē zuò zhě qī rén yǐ
子の曰はく、賢者は世を辟く。其の次は地を辟く。其の次は色を辟く。其の次は言を辟く。子の曰はく、作つ者は七人。

辟pì では古代の極刑、拓く。bìでは退位した君が帝位に復す、招致すること、であるが、ここでは避（さ）くbìの意味。賢者辟世は孔子の思想とは相容れない。そこで、「道が行われない」場合にと設定される。道が行われない場合どうすればよろしいか？という問ひへの答えと想定せざるを得ないものである。孔子が七人を挙げているため、この語を孔子が口にしたことじゃないとして落とすことが難しく、論語に収録されたのであろう。義疏にはその七人を特定しようとするが、集註はそれは鑿（うがつ）、無理に理屈をつけること、と否定した。集註は、「天下無道にして隱る。伯夷･太公の如き、是れなり。亂國を去り、治邦に適く。禮貌衰えて去る。違言有りて後去る。起ちて隱れ去る者、今七人なり、と。其の誰何を知る可からず。必ず其の人を求めて以て之を實にするは、則ち鑿なり。」とする。吉田松陰曰く、「文王至誠にして、老を養ふ。故に伯夷・太公動きて興起するなり。」太公は太公望。其の次については、引き続き賢者とみる説と賢者に次ぐ者とする説がある。国、邦に道なくば、その地を去る。君公に道なくば顔色を去る。あるいは言を去る。この二つは仕えることを避けるとなろうか。作（た）つとは起ちて隱れ去る者となし、七人と言ふ。義疏は、「王弼が云く、七人伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連也、鄭康成(鄭玄)が云く、伯夷、叔齊、虞仲は世を避る者、荷蕢、長沮、桀溺は地を避る者、柳下惠、小連は色を避る者、荷簣、楚狂接輿は言を避る者なり、七に當りて十と爲す、字の誤なり。」と当てはめている。義疏は、辟世は聖人の行為、それ以下は士のとるべき行動とみている。孔子の思想は吉田松陰の解釈であり、そういふ人物があらわれ賢者を生かすことがなくば、賢者が去るとなろう。
読書会：[2008年11月1日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月1日)

40）子路宿於石門晨門曰奚自子路曰自孔氏曰是知其不可而為之者與
zǐ lù sù yú shí mén chén mén yuē xī zì zǐ lù yuē zì kǒng shì yuē shì zhī qí bù kě ér wéi zhī zhě yú
子路、石門に宿す。晨門、曰く、奚くよりす。子路、曰く、孔氏よりす。曰く、是れ其れ不可を知りてこれを為す者か。

義疏に曰く、「石門は地名なり。子路行きて石門の宿に住むなり。石門は魯の城の門外を云ふなり。晨門、石門を守り晨、昏に開閉をする吏なり。魯人なり。自は從なり。子路既に石門に在り。守門の吏、朝早く開き子路が石門より行き過ぐるを見る。故に、子路に問ひて云く、汝、將に何よりして來るや。昏晨を守る者なり。子路答へて曰く、我此に行く、孔子の處より來れり。晨門子路が孔子よりと云ふを聞き、故に是れ孔子と知るなり。言ふ孔子世を教化すること不可を知りて、強く東西を周流し、是れ其れ不可を知りてこれを為す、故にこれを問ふ。」子路が宿したのが魯の城の門外の石門。晨門は石門を朝夕開閉する官吏。子路がどこから来たかを問ふ、晨門はうすうす感じていた。子路が孔子の家を出てきたと聞き、やはり孔子の弟子の子路と分かり、孔子を不可と知りながらこれをなす者と評した。この門番は何度も孔子や弟子が出入りするのを感慨をもって見ていたのであろう。集註は、晨門を賢人にして抱關（門番など卑しい役）に隱れし者ならん、とみる。不可を知りて之を為す、之とは諸国を放浪してまで、政を復興させるべき君公を求めていること。それが不可と知っているのは孔子ばかりじゃあるまい。子路、お前さんの方がもっと良く分かっているというのになあ。それでも行くのだな。晨門ですらそれが分かっているに、まだ放浪をつづける孔子。子路の足取りは一段と重くなった。
読書会：[2008年11月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月8日)

41）子擊磬於衛有荷蕢而過孔氏之門者曰有心哉擊磬乎既而曰鄙哉硜硜乎莫己知也斯己而已矣深則厲淺則揭子曰果哉末之難矣

zǐ jī qìng yú wèi yǒu hè kuì ér guò kǒng shì zhī mén zhě yuē yǒu xīn zāi jī qìng hū jì ér yuē bǐ zāi kēng kēng hū mò jǐ zhī yě sī yǐ ér yǐ yǐ shēn zé lì qiǎn zé jiē zǐ yuē guǒ zāi mò zhī nán yǐ
子、衛に磬を擊つ。蕢を荷ひて孔氏の門を過る者有りて曰く、心有るかな、磬を擊つや。既にして曰く、鄙しきかな、硜硜乎たり。己を知ること莫きなり。斯れ已みなむのみ。深ければ則ち厲し、淺ければ則ち揭ぐ。子の曰はく、果せるかな、難きこと末し。

磬（[中国百科](http://japanese.cri.cn/chinaabc/chapter23/chapter230601.htm)）は古代の打楽器。孔子は衛に滞在していた。蕢（き）は草器で土を運ぶもっこ。荷（にな）ふ、は背中に負うこと。そうして孔氏の門を過ぎる者が言ったといふが誰がそれを聞いて、孔子に伝へたものか？偶然に聞いたといふものではあるまい。孔子と知り、孔子に伝はることを目的に、弟子の誰かに言ったのであろう。有心とは気持ちがあらわれていること。磬は、古来、一日の仕事が終わった後にこの石を叩きながら様々な獣を真似た踊りを踊ったということに始まり、心を解放すべきものであるが、既而は後に、久しくして、しばらくすると、鄙（いや）しく、硜硜乎（こうこうこ）たり。心が堅いと言ふ。莫己知也、己（おのれ：孔子）を知るものはいない、と強い口調。斯已、ここでおしまい、やめたがいい。而已矣やんぬるかな、あああもう無理だね。更に詩の一節を引用した。集註に、「衣を以て水を渉るを厲と曰い、衣を攝げて水を渉るを掲と曰う。此の兩句、衛風匏有苦葉の詩なり。」とある。深ければ厲（れい）し、淺ければ揭（けい）す。義疏に、「若し世、教へること不可ならばこれを行ふこと如不掲（衣を掲げて水を渉ろうとしても無益）なり、若し世、教へること可ならばこれを行ふこと衣を掲げる如く以て水を渉るなり。」とある。諸国を放浪しても、知るものはいない、無益であり、止めたがよい、と孔子に告げたことになる。一種の狂であるまいか？直がある。集註に、「果たせるかなは、其の世を忘れるに果なるを歎ずるなり。末は無なり。聖人の心は天地と同じく、天下を視ること猶一家のごとく、中國は猶一人のごとく、一日も忘るること能わざるなり。故に荷蕢が言を聞きて、其の世を忘れるに果なるを歎き、且言う、人の出處、若し但此の如くすることは、則ち亦難き所無し、と。」ある。世をそう簡単にあきらめてはいけない、そうすることは難しくないが、と釈している。先生はこう申された。果哉は、果敢、果断の果で、きっぱりとしていること。末mòは否定、禁止をあらわし、吾末如之何は自分はこれをどうしようもない。難nán で困ること、難しいこと、nànで非難すること。末之難矣はこのことを非難してはいけない、とも読める。
読書会：[2008年11月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月8日)

42）子張曰書云高宗諒陰三年不言何謂也子曰何必高宗古之人皆然君薨百官總己以聽於冢宰三年

zǐ zhāng yuē shū yún gāo zōng liàng yīn sān nián bù yán hé wèi yě zǐ yuē hé bì gāo zōng gǔ rén jiē rán jūn hōng bǎi guān zǒng jǐ yǐ tīng yú zhǒng zǎi sān nián
子張が曰く、書に云ふ、高宗、諒陰三年言はず、何の謂ぞ。子の曰はく、何ぞ必しも高宗ならむ。古の人皆然り。君、薨づれば百官、己れを總べて以て冢宰に聽くこと三年。

義疏に曰く、「高宗は殷の中興の王なり、名は武丁、殷家は卅帝、水徳の王、六百廿九年。高宗は是れ第二十二帝なり。前帝、小乙の子なり。其の武丁登祚の時、殷祚已に三百四十三年を得る。其の徳高くして宗す可し。故に高宗と爲すと謂ふなり。諒は信なり。陰は默すなり。尚書に云はく、祚は其れ即位、乃ち或は亮陰（天子が父母の喪に服す期間）、三年言はず。是れ武丁、其れ王位に即くに起れり、則ち小乙死ず、乃ち信默有り、其の孝行、著（あきらか）なるを言ふ。子張、尚書を讀み、これを見て曉（あきら）かならず。世と異るに嫌（うたが）ひて、故に發して孔子に何の謂なりかを問ふ。」とある。子張が書経に、高宗が諒陰、父の喪に服す期間、三年、ものを言はなかったとあるのを見て、それはどういふことかと問ふた。先生が申されるに、それは高宗だけではない、古の人は皆そうであった。集註に曰く、

「君薨ずと言うときは、則ち諸侯も亦然り。己を總ぶは、己が職を總攝するを謂う。冢宰は太宰なり。百官冢宰に聽う。故に君以て三年言わざるを得るなり。」と。薨（こう）ずは、貴人がみまかること。百官、己（おのれ）を總（す）べて以て冢宰（ちょうさい）に聽（したがふ）こと三年、とは君主は口を閉ざし、百官は自分の職を自から行い問題があれば、太宰に従ふことになり、君主は命令を発することも、それに百官が答へることもなくなる。太宰、首相がすべてを取り仕切った。三年父の道を変えないことになる。
読書会：[2008年11月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月22日)

43）子曰上好禮則民易使也

zǐ yuē shàng hào lǐ zé mín yì shǐ yě
子の曰はく、上禮を好めば則ち民使ひ易し。

義疏に曰く、「禮は敬を以て主と爲す。君、既に禮を好めば、則ち民敢て敬せざること莫し。故に使ひ易し。」集註に曰く、「謝氏曰く、禮達して分定まる。故に民使い易し。」上が禮を好むとは、敬の精神が上下に通じるという見方、分が定まるという見方がある。漢や明という王朝に身を置いているからこういう認識となろう。いわゆる下克上で大夫政治となり、諸侯が家臣を使い難い現状、民を使い難い現状があった。これを正す処方として上が禮を好むが果たして有効か？孔子はそれだけでは無理と分かっていたはずである。春秋戦国時代の覇権を目指す政治の中では、禮のみでは如何？無理であり、漢という王朝が成立してこそ、日本では江戸幕府が成立してこそ禮の貫徹の威力がでる。孔子が周公の政治を復興せねばならぬと説いたこともそこにあろう。
読書会：[2008年11月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月22日)

44）子路問君子子曰脩己以敬曰如斯而已乎曰脩己以安人曰如斯而已乎曰脩己以安百姓脩己以安百姓堯舜其猶病諸

zǐ lù wèn jūn zǐ zǐ yuē xiū jǐ yǐ jìng yuē rú sī ér yǐ hū yuē xiū jǐ yǐ ān rén yuē rú sī ér yǐ hū yuē xiū jǐ yǐ ān bǎi xìng xiū jǐ yǐ ānbǎi xìng yáo shùn qí yóu bìng zhū
子路、君子を問ふ。子の曰はく、己を脩むるに敬を以てす。曰く、斯の如きのみか。曰はく、己を脩め以て人を安んず。曰く、斯の如きのみか。曰はく、己を脩めて以て百姓を安ず。己を脩め以て百姓を安んずは堯舜其れ猶ほこれに病めり。

義疏に曰く、「君子の法と爲すを問ふなり。身正しければ則ち民從ふ。故に君子自ら己が身を脩めて自ら敬すなり。子路其の少を嫌ふ、故に重ねて更に孔子に諮問す、此の如きのみか、斯れ此れなり、子路に答ふ。言當に能く先ず己を敬すを脩めてより、後に人を安づるなり。子路又少を嫌ふ。又答へて云はく、先ず己が身を敬すを脩め、然る後に乃ち百姓に安ずるなり。病は難なり。諸は之なり。言先ず能く内、己を脩めてより、外百姓を安ず。此の事大難となすなり。堯舜の聖、猶ほ此事を患へ難と爲す。故に、諸を病むと云ふなり。」集註に曰く、「己を脩むるに敬を以てす。夫子の言至れり盡くせり。而して子路之を少なしとす。故に再び其の充ち積むことの盛んにして、自然に物に及ぶ者を以て之に告ぐ。他に道無し。人は、己に對して言う。百姓は、則ち人を盡くす。堯舜も猶病めりは、以て此に加うること有る可からざるを言い、以て子路を抑え、反りて諸を近きに求めしむるなり。蓋し聖人の心窮まり無し。世極めて治まると雖も、然れども豈能く必ずしも四海の内、果たして一物も其の所を得ざること無きを知らんや。故に堯舜も猶百姓を安んずるを以て病とす。若し吾が治已に足れりと曰うときは、則ち聖人爲る所以に非ず。」子路が珍しく君子を問うている。「禮は敬を以て主と爲す。」先生は二つに事を申された。己を脩めなさい。それは敬を以て行いなさい。脩己以敬という四語。あまりの短さに、君子たるにはそれっきりですか？とあっけにとられてしまった。己を脩めたつもりかしらぬが、人を安んじることができるのかと、付け加えられたのが次の五語、脩己以安人。反応の早い子路のこと、それだけじゃない、その先はとたたみかけて聞くと、それが百姓を安んじることに及ぶか、それが難しいところだ。百姓とは諸々の氏族のこと。病とは難、心をくだき労すも得難きこと、かの堯舜といえど、そこには心をくだかれたが実にむつかしいことであったのではなかったか。[雍也篇28)](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)に子貢が博く民に施し、衆を濟（すく）ふは仁かと問うと、仁じゃなくで聖である。堯、舜、それ猶、諸を病む、というのがあった。脩己以敬に始まるといえど、脩己以敬に到達するは難し。
読書会：[2008年11月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月22日)

45）原壤夷俟子曰幼而不孫弟長而無述焉老而不死是為賊以杖叩其脛

yuán rǎng yí sì zǐ yuē yòu ér bú xùn tì zhăng ér wú shù yān lǎo ér bù sǐ shì wéi zéi yǐ zhàng kòu qí jìng
原壤夷して俟つ。子の曰はく、幼くして孫弟ならず、長じて述べず。老ひて死せず。是れ賊と為す。杖を以て其の脛を叩く。

義疏に曰く、「原壤は方外の聖人なり。禮教に拘らず、孔子と朋友と爲す。夷は踞なり。俟は待なり。壤、孔子來るを聞きて夷踞竪膝をして以て孔子の來るを待つなり。孔子は方内の聖人、恆に禮教を以て事を爲す。壤の不敬を見、故にこれを歴數して以て門徒を訓めるなり。言ふ壤少（わか）くして以て遜悌せず自ら居し、年長に至りて猶ほ自ら放恣、效述する所無きなり。言ふ壤、年已に老にして未だ死せず、不敬の事を行ひ、徳を賊害する所以なり。脛は脚の脛なり。膝上を股と曰ひ、膝下を脛と曰ふ。孔子、歴數してこれを言ふ。既に竟(おは)りて又、杖を以て壤の脛を叩き撃ち、其の脛をして夷踞せざりしむなり。」集註に曰く、「原壤は孔子の故人。母死したるときに歌う。蓋し老氏の流にして、自ら禮法の外に放てる者なり。夷は、蹲踞なり。俟つは待つなり。言うこころは、孔子の來れるを見て、而して蹲踞して以て之を待つなり、と。述は猶稱するがごとし。賊は人を害うの名。其の幼より老に至るまで、一つの善状も無くして、久しく世に生き、徒以て常を敗り俗を亂すに足るを以てするは、則ち是れ賊のみ。脛は足骨なり。孔子旣に之を責めて、因って曳く所の杖を以て、微（すこ）しく其の脛を擊つ。蹲踞すること勿からしむが若く然り。」原壤、孔子の故人、とは古い友人のこと。原壤の母が亡くなったとき、孔子は椁の準備を手伝った。その時原壤は木に登って椁について歌い始めた。「（木目が）貍首の斑然（まだら文様のよう）。女の手を執るように卷然（なめらか）」。従者がそんな人間とまだ付き合うのかと問うと、孔子は親しい者に親を失ってならず、故（ふる）い者に故を失ってはならないと聞くと言ったとされる（[禮記檀弓下第四](http://www.moroo.com/uzokusou/souketsu/raiki/04.html)）。禮教、禮法の外、老荘思想の人間と見られている。夷俟は坐って膝をたてて待つ、禮に外れている。孫弟は遜悌、素直で目上の人に従うこと、述は人の口に述べられる、称せられること。先生が申されるに、（原壤は）幼くして目上のいうことを聞かず、長じても人の口に上ることもなく、老いて死ぬこともない。これは、賊をなす、徳を損なう、人を損なうことである。そう申されて、手にしている杖で其の脛を叩かれた。つまり、周囲が会うなとするも旧友であるから会いに来たというに、せめて今回ばかりは立って旧友を迎えるのが禮であろうと、催促をされたことになろう。原壤がどうしたものか？片一方は坐り続け、片一方は立ち続け、無言で孔子が去ってしまえば、何のために会いに来たのか？双方に会うべき動機があったはずなのだが。禮記に、大夫が七十歳になって職を辞すことができない場合几と杖を賜るとあり（[禮記曲禮上第一](http://www.moroo.com/uzokusou/souketsu/raiki/01.html)）、孔子の晩年の出来事となる。

読書会：[2008年11月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年11月29日)

46）闕黨童子將命或問之曰益者與子曰吾見其居於位也見其與先生並行也非求益者也欲速成者也
què dǎng tóng zǐ jiāng mìng huò wèn zhī yuē yì zhě yú zǐ yuē wú jiàn qí jū yú wèi yě jiàn qí yǔ xiān shēng bìng xíng yě fēi qiú yì zhě yě yù sù chéng zhě yě
闕黨の童子、將命す。或ひとこれを問ひて曰く、益する者か。子の曰はく、吾其の位に居るを見るや、其の先生と並行するを見るなり。益を求むる者に非ざるなり、速やかに成るを欲する者なり。

義疏に曰く、「五百家、黨を爲す。此の黨名は闕、故に闕黨と云ふなり。童子は未だ冠者ならずの稱、將命、是は賓主之辭を傳へること。闕黨の中に一人の小兒有るを謂ふ、能く賓主の辭を傳へ出入するなり。或るひと小兒が傳辭するを見る。故に孔子に問ひて云く、此れ童子にして傳辭す、是れ自ら進みて益を求む道なるか。孔子、答へて云はく、其れ益を求む事に非ざるなり、禮は童子隅に坐す、別位有ること無し、而して此の童子讓らず、乃ち或る人と竝び居る位なり。隅角なり、童子をして成人と竝び位せしめず、但た席に就くに角にして坐す。是れ位無きなり。先生は成人、己の生れる先を謂ふなり、師を謂ふに非ざるなり。禮は父の齒（年齢の者）には隨行（ついて行ふ）し、兄の齒には雁行（ならび行ふ）す、此の童子長じて行ふに讓らず、故に先生と竝び行ふを云ふなり。孔子、又云はく、此の童子既に位に居り竝び行ふ、則ち自ら進みて益を求む道に非ざる、正に是れ速に成人を欲すのみ、禮を違へて速に成るを欲す者にて、是れ益を求む道に非ざるなり。」闕黨は孔子の住んでいた郷黨。そこに童子がおり將命、郷黨を訪れる賓客の言葉の取次ぎを行っていた。童子はまだ冠者（成人）前をいふ。それがなかなか要領を得ていたのであろうか、一緒にやっていた或る人が「益者」ではないか問うた。益とは水が皿から溢れることが原義、ここでは更に教へて育てるべき者のこと。孔子は実は違ったところを見ておられた。その童子の坐していた位置であるが、先生とはこの場合、先に生まれた大人のこと、師ではない、先生とは或る人のことであろうか、並んで坐して賓客と対応していた。禮によれば、本来なら或る人のあとについて行ふべきで、隅に坐すべきである。兄弟くらいの者であれば、並んで坐し並んで行ふべし。更に教えを求めている者ではなく、速成を欲しているにすぎない。求めるといふは自分を高めること、禮を学ぶ志もなく、人に譲るという心もない、早く一人前にみせたいという欲望が先走っているだけである、となろうか。

読書会：[2008年12月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年12月６日)

了　2008.12.06